兵庫県文化財調査報告　第387冊

明　石　市

明石城武家屋敷跡Ⅲ

－明石公共職業安定所増築建築工事に伴う発掘調査報告書－

平成23（2011）年３月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

明石城武家屋敷跡Ⅲ

兵庫県文化財調査報告　第387冊

兵庫県教育委員会

22教Ⓟ1-015A4

明石市

明石城武家屋敷跡Ⅲ

－明石公共職業安定所増築建築工事に伴う発掘調査報告書－

例　　言

1．本書は、兵庫県明石市大明石町２丁目２－９に所在する明石城武家屋敷跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、明石公共職業安定所増築工事に先立つもので、国土交通省近畿地方整備局の委託を受け、兵庫教育委員会埋蔵文化財調査事務所が平成16年度に確認調査及び本発掘調査を実施した。

　本発掘調査の発掘作業については国土交通省近畿地方整備局が発注する明石公共職業安定所増築建築工事の本体工事に含めて、（株）川島建設が行った。

3．整理作業は、厚生労働省兵庫労働局の委託を受け、平成22年度に兵庫県立考古博物館が実施した。遺物写真については（株）タニグチフォトに委託し、一部の遺物についてはデジタル写真合成を測点堂に委託した。

4．本書に示した座標は世界測地系による国土座標（第Ⅴ系）を使用したもので、方位はすべて座標北を、標高は東京湾平均海水準で示している。

5．本書の編集・執筆は池田征弘が行った。

6　本書にかかる遺物・図面・写真などは兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に保管する。

7．発掘調査および報告書作成にあたり、以下の方々の御援助・御指導・御教示を頂いた。記して深く感謝の意を表するものである。

稲原昭嘉、宮本博、山下俊郎

本文目次

第１章　遺跡の位置
第１節　遺跡の位置 …… 1
第２節　明石城の沿革 …… 2
第３節　明石城武家屋敷跡の調査 …… 3

第２章　調査の経緯
第１節　調査に至る経過 …… 4
第２節　調査の経過 …… 4
第３節　整理作業の経過 …… 5

第３章　調査の成果
第１節　遺跡の概要
１．層序 …… 6
２．遺構の概要 …… 7
第２節　遺構と遺物
１．西部 …… 7
２．東部 …… 10
３．金属製品 …… 14

第４章　まとめ …… 15
第１節　遺構の変遷 …… 15
第２節　居住者の変遷 …… 18

付表
付表１　土器・陶磁器一覧表 …… 20
付表２　金属製品一覧表 …… 24

挿図目次

第１図　調査地の位置 …… 1
第２図　武家屋敷地割復元図 …… 2
第３図　調査地の配置 …… 4
第４図　調査区の配置 …… 6
第５図　遺構の変遷 …… 16
第６図　居住者の変遷 …… 17

表 目 次

第１表　調査一覧 …… 4

図版目次

図版１　第１面平面図
図版２　第２・３面平面図
図版３　土層断面図
図版４　西部の遺構（１）
図版５　西部の遺構（２）
図版６　西部の遺構（３）
図版７　西部の遺構（４）
図版８　東部の遺構（１）
図版９　東部の遺構（２）
図版10　東部の遺構（３）
図版11　土器・陶磁器（１）
図版12　土器・陶磁器（２）
図版13　土器・陶磁器（３）
図版14　土器・陶磁器（４）
図版15　土器・陶磁器（５）
図版16　土器・陶磁器（６）
図版17　土器・陶磁器（７）
図版18　土器・陶磁器（８）
図版19　土器・陶磁器（９）
図版20　土器・陶磁器（10）
図版21　銘款・刻印など
図版22　金属製品

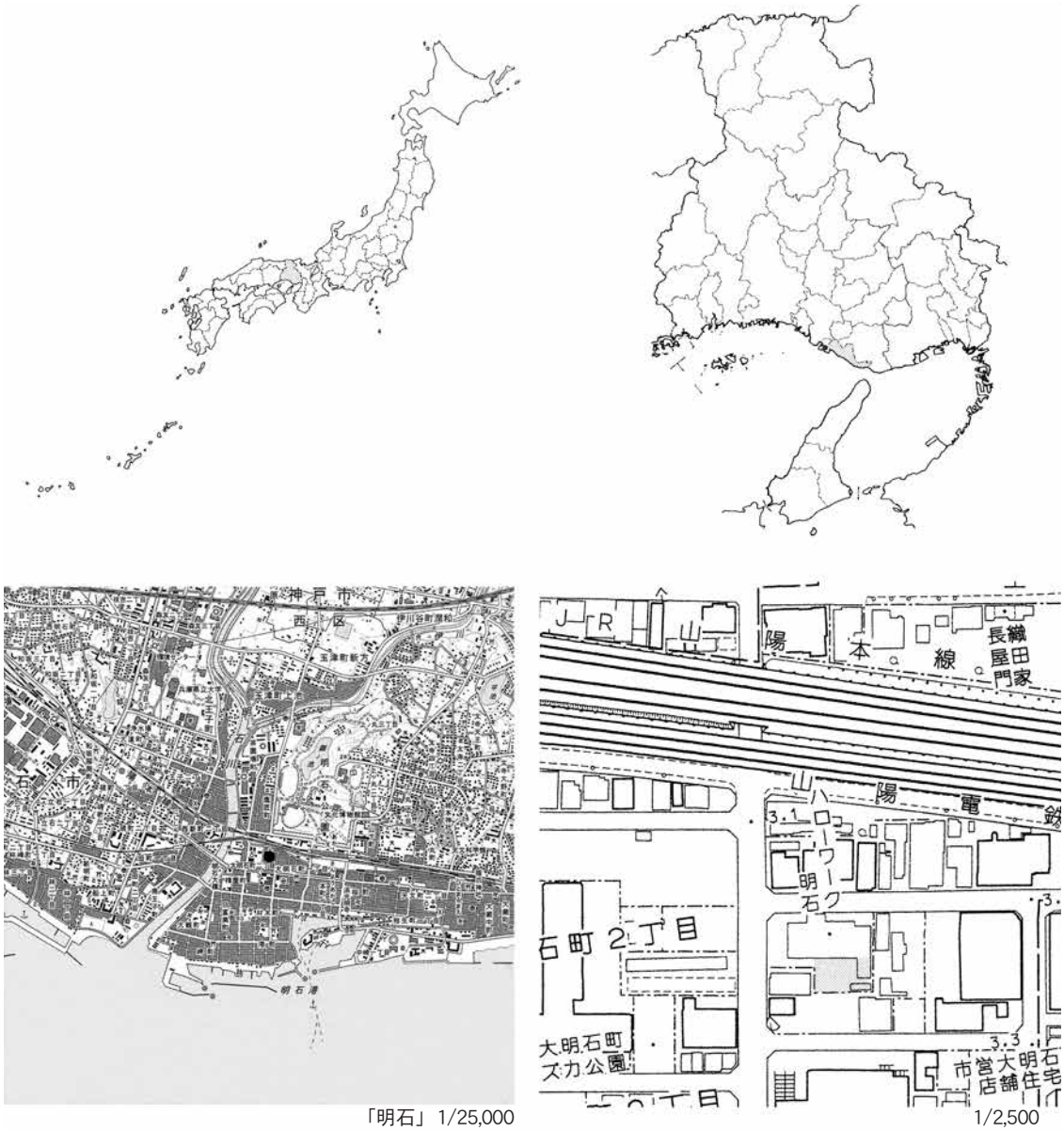
写真図版目次

写真図版１　上：西部　２区１面全景（北から）
中：西部　２区１面全景（東から）
下：西部　２区２面全景（北から）
写真図版２　上：西部　３区１面西部（北から）
中：西部　３区２面西部（西から）
下：西部　３区３面東部（東から）
写真図版３　上：西部　２－24･30区礎石（西から）
中：西部　２－30区礎石断面（東から）
下：西部　２－24区礎石（南から）
写真図版４　上：西部　ＳＫ２２（北から）
中：西部　ＳＫ２３（北から）
下：西部　ＳＫ２８（南から）
写真図版５　上：西部　ＳＥ０１（北から）
中：西部　ＳＫ２７（北から）
下：西部　ＳＫ３０（南から）
写真図版６　上：東部　１区１面全景（南西から）
中：東部　１区１面北西部（東から）
下：東部　ＳＫ３７（南から）
写真図版７　上：東部　ＳＫ３３（南から）
中：東部　ＳＫ34（北東から）
下：東部　ＳＫ34遺物（北から）
写真図版８　土器・陶磁器（１）
写真図版９　土器・陶磁器（２）
写真図版10　土器・陶磁器（３）
写真図版11　土器・陶磁器（４）
写真図版12　土器・陶磁器（５）
写真図版13　土器・陶磁器（６）
写真図版14　土器・陶磁器（７）
写真図版15　土器・陶磁器（８）
写真図版16　土器・陶磁器（９）
写真図版17　土器・陶磁器（10）
写真図版18　土器・陶磁器（11）
写真図版19　金属製品

第１章　遺跡の位置

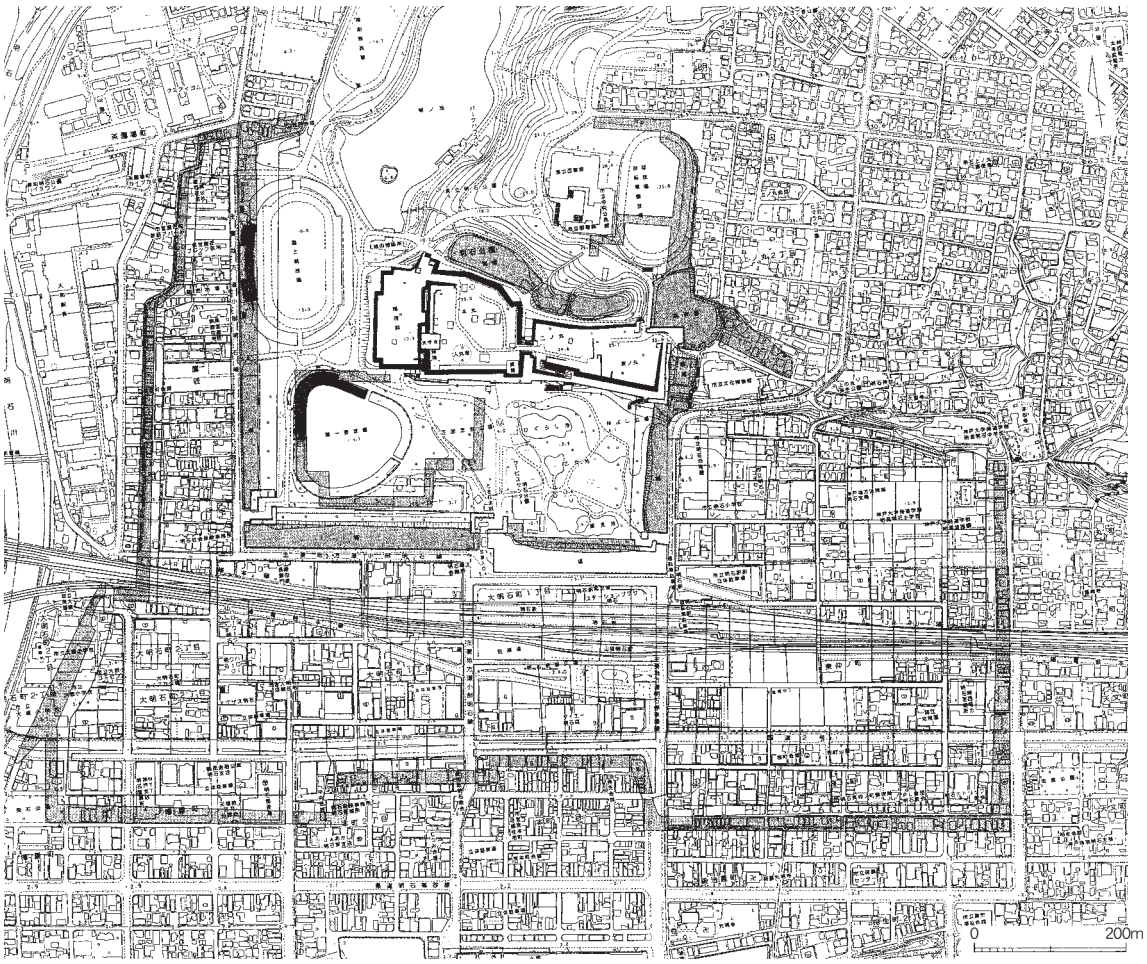
第１節　遺跡の位置

明石城の所在する明石市は兵庫県西部の播磨地域に属し、その東端に位置している。そして、その南側には幅約４kmの明石海峡を挟んで淡路島が対している。東西に長い市域の大半は段丘であり、明石川の河口部にのみ沖積地が広がっている。この河口部西岸の沖積地に明石城の城下町を基に発展した市街地が広がっている。現在明石市街地には国道２号線・ＪＲ山陽本線・山陽電鉄などが東西に通り、市街地の南側に設けられた明石港を通じて淡路島と結びつき、近年は明石海峡大橋に大きくその役割を譲るにいたっている。



「明石」1/25,000　　1/2,500

第１図　調査地の位置



第２図　武家屋敷地割復元図

明石城は現市街地の北側に突き出た段丘を利用して主郭部を造り、その南側を取り囲むように中堀・外堀が２重に巡っている。現在も残る中堀に囲まれた範囲には殿様の御殿（居屋舗）や一門の屋敷地が設けられ、明治期に埋められた外堀に囲まれた範囲には家臣たちの武家屋敷が建ち並んでいた。武家屋敷の多くは外堀内に設けられていたが、下級家臣の一部の屋敷は外堀外東部や外堀外南西部にも設けられていた。

町屋は外堀南側を迂回させられた西国街道を軸に発展し、その南側には湊が設けられている。寺は河口部に近い城下町南西部に集中して設けられ寺町を形成している。

第２節　明石城の沿革

始めて明石川河口部に政治的拠点が設けられたのは、天正14年（1586）頃に明石の地を与えられた高山右近が河口に近い明石川右岸に船上城を築いた時である。翌年、高山右近はキリシタン弾圧のため追放され、豊臣家の直轄領になったようである。慶長５年（1600）には池田輝政に播磨一国が与えられ、船上城には家老や一門の池田利政、池田由之、池田輝高が入っている。

元和３年（1617）に小笠原忠政が信濃松本より転封（石高10万石）となった。それに伴い、元和４年（1618）より天下普請によって明石城が建設されることとなり、元和６年（1620）に完成した。以後、戸田松平家（1633～1639）、大久保家（1639～1649）、藤井松平家（1649～1679）、本多家

（1679～1682）と比較的短期間で城主（石高６・７万石）を替える。天和２年、越前松平家が越前大野より転封（石高６万石）になり、以後明治４年（1871）の廃藩置県にいたるまで続く。

武家屋敷地も城郭部と共に元和４年からの築城時に整備されたと考えられ、正保期（1645～1654）以後に描かれた絵図によると、武家屋敷地のプランについてはそれほど大きな改変を加えられていないことが推察される。

第３節　明石城武家屋敷跡の調査

明石城及びその武家屋敷の調査については、まず明石城本体の調査から始まった。兵庫県教育委員会は、昭和52～54年度に県立明石公園の施設整備に伴い全面調査を行い（1）、主郭部の櫓台や石垣についての調査が行われた。その後も小規模な調査を行ってきた（2）。その後、平成７年１月17日の兵庫県南部地震によって明石城についても石垣の崩壊や櫓の破損などの大きな被害を受けた。そして、その修復に伴って兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所では平成７・８年度に昭和52～54年度に次ぐ比較的大規模な調査を行った（3）。

武家屋敷の調査については山陽電鉄連続立体交差事業に伴って昭和60年度より明石市教育委員会が確認調査を行ったことに始まった。そして、それを受けて兵庫県教育委員会は昭和61～63年度に全面調査を行った。以後、武家屋敷の調査は明石市教育委員会によって数多く行われ、明石駅前広場整備事業（約4000㎡）や東仲ノ町地区市街地再開発事業（約17000㎡）に伴う調査のような大規模な調査も行われている（4）。

（１）兵庫県教育委員会『明石城跡』1984年
（２）兵庫県教育委員会『明石城跡Ⅱ』1986年
（３）石垣の解体修理に伴う調査については
　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『明石城跡Ⅲ』2000年
　櫓の解体修理に伴う調査については
　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『平成８年度年報』2000年
　またそれぞれについて、土木・建築学的見地から以下の報告書が刊行されている。
（財）文化財建造物保存技術協会『明石公園石垣災害復旧工事報告書』2000年
（財）文化財建造物保存技術協会『重要文化財明石城巽櫓・坤櫓災害復旧工事報告書』2000年
（４）兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『明石城武家屋敷跡Ⅰ』1992年
　明石市教育委員会『明石城武家屋敷跡Ⅰ』1994年
　明石市教育委員会『明石城武家屋敷跡Ⅱ』2000年

第２章　調査の経緯

第１節　調査に至る経過

国土交通省近畿地方整備局は兵庫県明石市大明石町２丁目２－９において明石公共職業安定所（ハローワーク）増築建築工事を計画した。工事予定地は周知の遺跡である明石城武家屋敷跡（兵庫県遺跡地図遺跡番号40181）の範囲内にあたる。そこで、兵庫県教育委員会では国土交通省近畿地方整備局より依頼を受け、兵庫県立考古博物館が平成16年度に確認調査・本発掘調査を実施した。

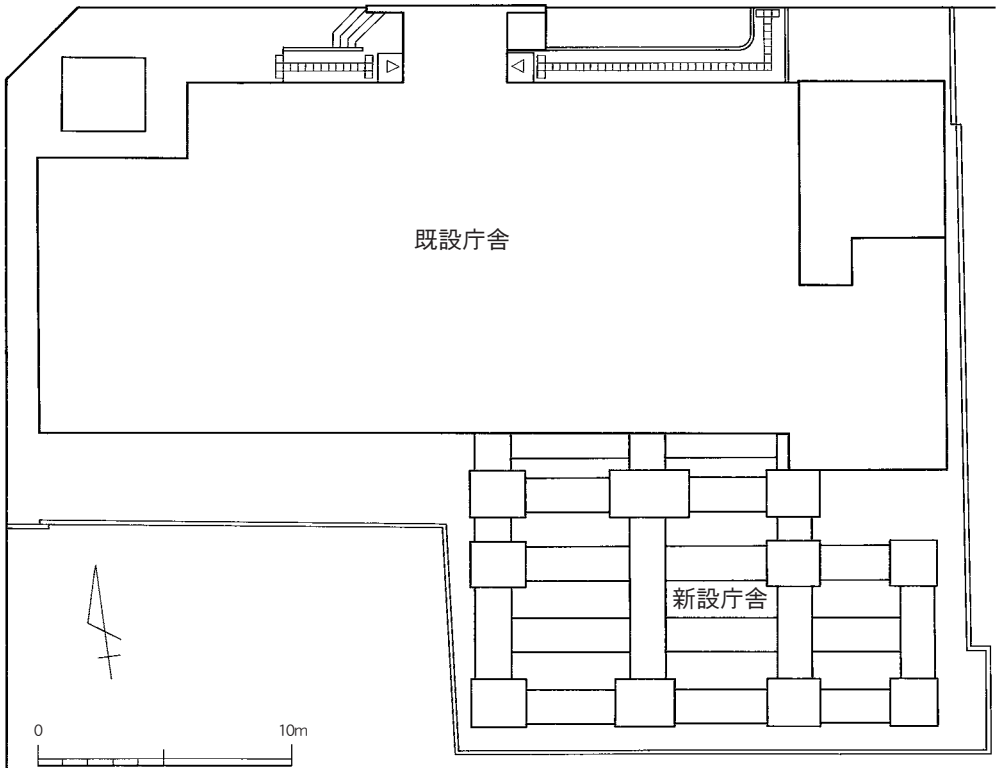
第１表　調査一覧

遺跡調査番号	調査の種別	調査担当者	調査期間	調査面積
２００４２３７	確認調査	企画調整班　中川　渉	平成 16 年 11 月９日	78㎡
２００４２５９	本発掘調査	調査第２班　池田征弘	平成 17 年２月 14 日～３月３日	760㎡

第２節　調査の経過

１．確認調査

事業用地は既存本庁舎の南東部に位置し、仮設建物（倉庫棟・会議室棟）が存在した部分である。対象地の北西部に２ｍ×１ｍの調査区を１箇所設定した（本発掘調査の3-22区付近）。



第３図　調査地の配置

調査の結果、地表下35～65cmの深度に江戸時代の包含層が存在することから、事業予定地内に明石城武家屋敷跡の遺構が遺存しているものと思われた。

２．本発掘調査

本発掘調査は庁舎建設予定地の基礎部分のみを対象に行った。そのため、調査区は井桁状になっている。調査を行った深さも基礎部分の掘削深度に応じて地面より67～42cmまでであるが、この高さまでに検出された遺構については一部を除いて完掘を行った。

調査は廃土を用地内で仮置きするため、東部を１区、西南部を２区、西北部を３区として３回に分けて行った。表土・盛土の掘削は重機で行い、包含層の掘削や遺構の検出・掘削については全て人力でおこなった。検出した遺構については写真撮影および実測図の作成を行った。

第３節　整理作業の経過

出土品整理作業は厚生労働省兵庫労働局の委託を受け、平成22年度に行った。調査で出土した遺物（28ｌ入りコンテナにして24箱・金属器13点）について、当事務所にて接合・復元・実測・拓本・写真撮影などを行い、遺構図および遺物実測図についてトレース・レイアウトを行った。なお、遺物写真については（株）タニグチフォトに委託し、一部の遺物についてはデジタル写真合成を測点堂に委託した。

作業は整理保存課岡田章一・山本誠の補助のもとに調査第２課池田征弘が担当し、金属器の保存処理作業については整理保存課岡本一秀が担当した。

また、上記の作業にあたっては下記嘱託員の協力を得た。

松本嘉子　眞子ふさ恵　吉田優子　蔵幾子　三好綾子　伊藤ミネ子　宮野正子
齋藤由紀　谷脇里奈　佐々木愛　大前篤子　藤井光代　長濱重美　前田恵梨子
浜脇多規子　桂昭子

第３章　調査の成果

第１節　調査の概要

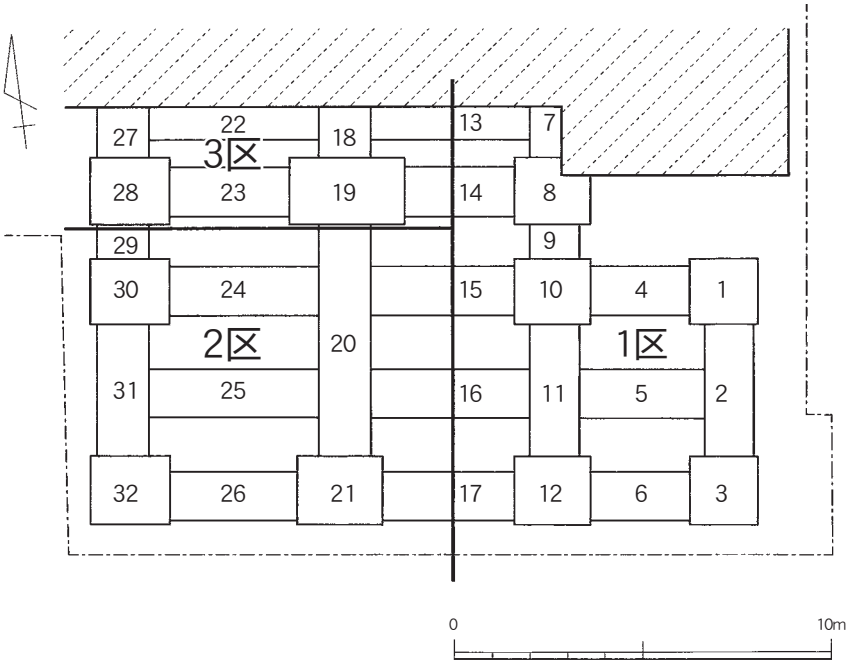
１．層序〔図版３〕

調査地は明石川現河道と明石駅周辺を流れた旧河道との間に形成された扇状地状の微高地上に位置している。近世以降の遺跡の基盤となる層は明石川の氾濫による細砂～シルト質極細砂層（32層）を主としている。調査区が井桁状で、撹乱が多く、調査区内での地形の高低ははっきりしない。おおむね、西に高く東に低く、北が高く、南に低い地形と思われる。最高所の標高は3.1ｍである。

基盤層の上には中世～江戸中期にかけての堆積土もしくは整地土（31層の部分）が存在する。西北の一部分（３区南部）のみ31層の上部10～20㎝の部分とその下に分けて調査を行ったが、その他の部分ではよく確認できなかった。江戸中期までの整地層の上には江戸中期の遺物を含む洪水砂（29層）が流れ込んでおり、その上に整地層（27・25層）がなされている。おそらく27層が江戸中・後期の整地層、25層が江戸末期の整地層と考えられる。その上には近代（戦前）の表土（3・9層）が薄く全体的に広がっている。戦後には戦災による片づけ層を含む厚い盛土（１層）が行われ、現在に至っている。

遺構の検出は江戸時代末期の主要な遺構面である25層上で一旦おこなった。東部では若干の遺構を検出したが、西部ではあまり明瞭に遺構が検出されなかたため、結果的には江戸中・後期の整地層（27層）をやや削り込んで検出をおこなった。

その後、２区北部・３区南部では31層の上部を削り込んで調査を行った（第２面）。さらに、３区南部ではさらに10～20㎝掘り下げて32層上面で、調査を行った（第３面）。



第４図　調査区の配置

２．遺構の概要〔図版１・２〕

調査地は東部を１区、西南部を２区、西北部を３区として３回に分けて行った。調査区の形状が井桁状であるため、各地区内は第４図の通りに細分したブロック名を付した。

調査区内は検出された遺構の状況によって、西部（２・３区）と東部（１区）に分けられる。

西部〔写真図版１・２〕

西部では北西部付近で礎石が検出されている。この周辺で建物が存在したと考えられ、検出面からみると江戸後期以降のものが多いように思われる。調査区南端部では浅い土坑（ＳＡ０１）が並んでおり、塀に関連する可能性が考えられる。土坑については大小様々なものが検出されているが、用途が推測できるものはほとんどない。西部の東部寄りで検出されたＳＫ２２やＳＫ２７は埋桶の可能性がある。井戸（ＳＥ０１）については近代のものと考えられる。

第３面の西北隅付近で検出された南北方向の浅い溝は鋤溝の残存部分である。時期ははっきりしないが中世のものと思われる。

東部〔写真図版６〕

東部でも大小様々な土坑が検出されているが、西部に比べて大型の廃棄土坑が多い。東端部は南北方向の溝状を呈し、南東部は全体に低くなっている。位置的には屋敷地の区画溝の可能性が高く、幕末以後は廃棄土坑として埋められている。

第２節　遺構と遺物

以下に西部と東部に分けて、各遺構とその遺構から出土した遺物について述べる。金属製品については別に項目を立てて記述した。遺物の記述にあたっては下記の文献を参考にした。

肥前陶磁：大橋康二『肥前陶磁』1989年
　　九州近世陶磁研究会『九州陶磁の編年』2000年

丹波陶器擂鉢：長谷川真「生産⑥『丹波』～近世丹波焼の諸相」『江戸時代のやきもの－生産と流通－』2006年

明石陶器擂鉢：稲原昭嘉「明石擂鉢の編年について」『近世の実年代資料』2000年　関西近世考古学研究会

土師器：村上泰樹「土器類」『明石城武家屋敷跡』1992年
　　井上智代「明石城武家屋敷跡の土師皿」『歴史と神戸』37巻５号　1998年

１．西部

礎石群〔図版４、写真図版３〕

西部の北西部、２－24・29～31区、３－23・28区で礎石が16基検出された。検出された高さから見ると幕末以降のものは３－28区で１基、３－23区で１基、江戸中期以前のものはⅡ－24区で１基検出され、それ以外は江戸後期のものである可能性が高い。礎石の大きさは大きいもので長50㎝、幅25㎝で、長25㎝程度のものが多い。西壁沿いに検出されたものは径15㎝程度の小さいものである。礎石は

掘方を確認できるものは少なく、整地と併行して設置された可能性が高い。

調査区が井桁状であることから建物の規模・構造を復元することはできないが、この部分で比較的長期間にわたって建物が存在したことがうかがわれる。

ＳＡ０１〔図版５〕

２－21・32区第１面の南端部で検出された。直径約40㎝、深さ25～15㎝の土坑が３基東西に並び、土坑間は２ｍである。東側は撹乱が存在し、西側は調査区外であるため、東西に続いているかどうかは分からない。各土坑内から遺物は出土していない。南の土地境界からの距離は約１ｍで、塀の添柱の痕跡の可能性が考えられる。

ＳＫ１７〔図版５、写真図版８〕

２－29区第１面で検出された土坑である。直径30㎝の平面円形で、深さは12㎝である。埋土から須恵器蓋杯破片（１）が出土している。

１は須恵器蓋杯破片で、外面に回転ヘラケズリが施されている。

ＳＫ１９〔図版５・11、写真図版８〕

２－30区第１面西端で検出された土坑である。直径50㎝の平面円形と思われ、西側は調査区外である。深さは34㎝である。埋土から白磁小皿（２）、桟瓦が出土している。

２は白磁小皿で、19世紀以降のものと考えられる。

ＳＫ２０〔図版５・11・18・22、写真図版８・19〕

２－25・31区第１面で検出された東西に長い不整形土坑である。西端は調査区外で、東側は地形の下がりとともに消滅している。幅は130～100㎝、深さは深いところで30㎝である。最下層に洪水砂が堆積しており、洪水による地形の抉れかもしれない。埋土から染付青磁碗（110）、染付磁器皿（111）、無釉陶器擂鉢（３）、土師器焙烙（４・５）、煙管（M2）、刀（M4）、鉄釘（M8）、珊瑚が出土している。17世紀頃の遺物が多い。

110は肥前系の染付青磁の天目形碗で、見込みに花文が描かれている。肥前Ⅲ期（17世紀後半）頃のものである。111は肥前系の染付磁器皿である。畳付に砂が付着している。肥前Ⅱ－１期（17世紀前葉）のものである。３は備前系の無釉陶器擂鉢で近世Ⅱ期Ｂ（17世紀第３四半期）と考えられる。４・５は土師器焙烙である。口縁部に約１㎝間隔の２箇所１組の穿孔がなされている。５は底部外面に平行タタキが施されていることから、17世紀中葉前後のものと考えられる。

ＳＫ２１〔図版６・11、写真図版８〕

２－24区第１面で検出された土坑である。南北に長い土坑の中央のみ一段と深く下がっている。長さは110㎝以上であるが、北側の３－23区、南側の２－25区には延びていないため溝にはならない。幅は58㎝、深さは50㎝である。埋土から肥前系施釉陶器碗（刷毛目唐津）、丸瓦（６）が出土している。17世紀後半頃の年代が考えられる。

ＳＫ２２〔図版６、写真図版４〕

２－16区第１面で検出された土坑である。直径70cmの円形土坑で、深さは20cmである。平面・断面の形状から埋桶の可能性が高いと考えられる。埋土から土師器細片、施釉陶器細片が出土している。

ＳＫ２３〔図版６・11、写真図版４、写真図版８・９〕

２－26区第１面で検出された土坑である。長50cm以上、幅50cmの不整形土坑で、深さは16cmである。土坑内床面には無釉陶器擂鉢（７～10）の破片が伏せて重ねられていた。

７～10は明石系の無釉陶器擂鉢で、片口は両端を指で押さえたにすぎない。見込みの擂目は８が放射状、９は１方向に４箇所と考えられる。いずれも擂目の摩滅は認められず、未使用である。８はⅡ－２類で18世紀後葉～19世紀中葉と考えられる。

ＳＫ２４〔図版６〕

２－26区第１面で検出された土坑である。長40cm、幅20cmの平面楕円形で、深さは10cmである。埋土から施釉陶器細片、鉄釘が出土している。

ＳＫ２８〔図版６・11・22、写真図版４・９・19〕

２－28区第１面で検出された土坑である。長64cm、幅54cmの平面楕円形で、深さは48cmである。土坑の床面には直径16cm、深さ18cmのピットがある。土師器焜炉破片、土師器碗（12）、須恵器杯Ａ（13）、熨斗瓦（11）、鉄釘（M7）が出土している。

11は熨斗瓦である。凹面に１単位６本の櫛目が入れられている。12は土師器碗である。13は須恵器杯Ａで、底部はヘラ切り未調整である。12・13は混入の遺物と考えられる。

ＳＥ０１〔図版６・11、写真図版５・９〕

３-23区第１面で検出された井戸である。北部のみしか検出できず、深さも井戸瓦２段目の上部を確認するにとどめた。直径は約70cmと推定される。井戸瓦を１段に８枚組み合わせ、井戸瓦の外側に漆喰を巻いている。掘方は方形で、幅132cmである。

17は井戸瓦である。凸面に４列のキザミ目が入れられている。近代のものと考えられる。

ＳＫ２６〔図版７〕

２－24区第２面で検出された土坑である。直径32cmの平面円形で、深さ７cmである。埋土から須恵器小片が出土している。

ＳＫ２７〔図版７・11、写真図版５・９〕

２－20区第２面で検出された土坑である。直径95cmの平面円形で、深さは40cmである。底部にはごく薄く底板が残存していた。平面・断面の形状からも埋桶の可能性が高いと考えられる。埋土から無釉陶器擂鉢（10）、丸瓦、平瓦が出土している。

10の無釉陶器擂鉢は産地が不詳であるが、口縁部の形態や擂目がまばらであることから、17世紀代

のものと考えられる。

ＳＫ３０〔図版７、写真図版５〕

３－19区第３面で検出された土坑である。北部はコンクリート基礎の下で、南部のみしか検出できなかった。直径100㎝の平面円形で、深さは76㎝である。底部は不均一にすぼまっている。埋土から土師器皿、染付磁器碗破片が出土している。染付磁器碗の口縁部内面に菱形文が認められることから、18世紀頃と思われる。

Ｐ３１〔写真図版９〕

３－14区第３面で検出されたピットである。直径25㎝で、深さ27㎝である。埋土から須恵器底部（14）が出土している。

14は須恵器底部で、切り離しは回転糸切りである。

Ｐ３２〔図版 11、写真図版５・９〕

３－14区第３面で検出されたピットである。直径14㎝で、深さ3㎝である。埋土から土師器羽釜（15）、無釉陶器破片、施釉陶器破片が出土している。

15は土師器羽釜で、鍔の断面が三角形を呈している。長谷川編年Ⅵ期（15世紀後半～16世紀初頭）のものと思われる。

ＳＤ０１〔写真図版９〕

３－23区第３面で検出された南北方向の溝である。南北両端とも調査区外である。幅10㎝、深さ２㎝である。埋土から白磁皿（16）が出土している。

16は白磁皿である。口縁端部内面が露胎である。

包含層〔図版 15、写真図版 15・16〕

下層面上の整地層中に12～17世紀代の比較的古い遺物が含まれている。73のみ撹乱部分で出土したものである。

71は肥前系の施釉陶器皿である。肥前Ⅱ期で17世紀前半のものと思われる。72は瀬戸美濃系の施釉陶器皿で、見込みに菊花文が押されている。74は土師器焙烙で、底部外面に平行タタキが施されていることから、17世紀中葉前後のものと考えられる。75は土師器羽釜で、鍔の断面が三角形を呈している。長谷川編年Ⅵ期（15世紀後半～16世紀初頭）のものと思われる。76は須恵器の碗で、12世紀頃のものである。77・78は須恵器の鉢で、14世紀頃のものである。

２．東部

ＳＫ０１〔図版８・12・18、写真図版９・10〕

１－４区第１面で検出された土坑である。直径50㎝の平面円形で、深さ30㎝である。埋土から染付磁器碗（広東碗）・鉢（112）、施釉陶器蓋（22・23）、土師器小皿（18～21）、鉄釘（M11）が出土している。18世紀後半以降の遺構と考えられる。

18～21は土師器小皿である。いずれも底部は回転糸切りである。口縁部にススが付着している。18の内面にはヘラ書き状のものがあるが、文字かキズははっきりしない。20・21は柿釉が施されている。22・23は京焼系の施釉陶器蓋である。112は肥前系の染付磁器鉢である。肥前Ⅳ期（18世紀前半）以降のものと考えられる。

ＳＫ０３〔図版８〕

１－15区第１面で検出された土坑である。直径43cmの平面円形で、深さ18cmである。埋土から遺物は出土していない。

ＳＫ０９〔図版８・18〕

１－10区第１面で検出された土坑である。直径約70cmの平面不整円形で、深さ20cmである。埋土から染付磁器碗（113）が出土している。

113は肥前系の染付磁器の丸碗である。

ＳＫ１２〔図版８・15、写真図版 14〕

１－10区第２面で検出された土坑である。長70cm、幅52cmの平面楕円形で、深さ15cmである。埋土から施釉陶器碗（66）が出土している。

66は京焼系の施釉陶器碗である。

ＳＫ１３〔図版８・12、写真図版 10〕

１－10区第１面で検出された土坑である。長180cm、幅約90cmの平面楕円形で、深さ60cmである。埋土から土師器焼塩壺蓋（24）、施釉陶器鍋（25）、桟瓦（26）、丸瓦（27・28）が出土している。

25は京焼系の施釉陶器鍋である。体部内面上端に重ね焼き時の別個体の破片が付着している。28は丸瓦で、凹面に内叩き痕が認められる。

ＳＫ３３〔図版９・13・14・18・19、写真図版７・10～13〕

１－５・11・16区第１面で検出された土坑である。東西4.2ｍ、南北2.6ｍの平面楕円形で、深さ1.0ｍである。全体の１／２程度が調査区外となり、深さも深いことから、遺構内部の掘削は南北方向のトレンチ状に行うにとどめた。埋土には遺物が詰まっており、染付磁器碗（114～119）・蓋（120）・皿（122～124）・鉢（126・127）・水滴（128）、染付青磁蓋（121）・鉢（125）、色絵磁器蓋（129）・鉢（130）・皿（132）、磁器鉢（131）、陶胎染付鉢（133）、施釉陶器甕（29）・蓋（30）・秉燭（31）・不明（32）、無釉陶器擂鉢（33）、土師器小皿（34・35）・焜炉（36～42）・焜炉蓋（43）・焼台（44）、瓦質土器羽釜（45・46）、ガラス瓶（47）、軒丸瓦（48・49）、鉄釘（M9）などが出土している。18世紀後半以降の遺物が含まれるが、銅板転写の染付磁器碗（116～118）・皿（122・123）などが含まれることからおおむね明治年間（19世紀後葉）に埋められたと考えられる。

114は肥前系の染付磁器碗である。肥前Ⅳ期（18世紀後半）のものである。116は瀬戸系の染付磁器飯茶碗である。19世紀中葉以降のものと考えられる。117・118は染付磁器の飯茶碗で、高台内に117

は「春旭園製」、118は「升旭軒製」の銘がある。120は肥前系の染付磁器蓋で、肥前Ⅴ期（19世紀前半）のものである。121は肥前系の染付青磁蓋である。つまみ内の銘はほとんど見えないが、崩れた渦幅と思われる。肥前Ⅳ期（18世紀後半）と考えられる。124は染付磁器皿で、肥前Ⅴ期（19世紀前半）のものである。129は色絵磁器蓋で、つまみ内に朱でハート形内に「明月焼」の銘がある。132は瀬戸美濃系の色絵磁器皿である。見込みの地紋は文字で、内面に朱で、詩歌のようなもの（未読）、高台内には「囲省」と書かれている。19世紀前・中葉頃のものである。29は丹波系の施釉陶器甕である。ⅣＢ２e類で、18世紀末以降のものと考えられる。30は施釉陶器蓋である。外面にトビカンナが施されている。31は施釉陶器秉燭である。黒釉が施釉されている。底部は回転糸切りである。32は施釉陶器不明である。小型の短径壷に高い脚が付いている。把手・注口・脚下端部は剥離している。緑釉が施されている。33は明石系の無釉陶器擂鉢である。Ⅱ－３類で、19世紀のものと考えられる。34･35は土師器小皿である。柿釉が施されている。36～42は土師器焜炉である。外面に柿釉が施されている。脚部外面に「へ木」・「へ定」・「へコ」・「末廣」などの刻印が押されている。43は土師器焜炉蓋である。外面は柿釉が施釉されている。44は土師器焼台である。内面には断面三角の台が、放射状に３方へ延びるように付けられている。深緑色のガラス質のものが４㎜程度の厚さで溜まっている。45･46は瓦質土器羽釜である。45は口縁部外面に３条の凹線をもっている。47はガラス瓶である。外面に「全乳　明石協心社」の文字が浮き出ており、牛乳瓶と考えられる。

ＳＫ３４〔図版 10・15・19、写真図版７・15〕

１－１・４区第２面で検出された土坑である。東西3.2m、深さ60㎝で、南北は調査区外である。土坑内床面から施釉陶器甕（67）・行平鍋（69）・蓋（152）、土師器焜炉（70）、埋土から施釉陶器徳利（68）が出土している。埋土上層は東側のＳＫ３６上の整地土と同時に掘削したため、この部分の遺物は分別できず、包含層の暗灰色整地層・黄色整地層として報告する。

67は丹波系の施釉陶器甕で、19世紀前半のものである。68は丹波系の無釉陶器徳利で、18世紀中・後葉のものである。69は京焼系の施釉陶器行平鍋である。152は京焼系の施釉陶器蓋である。70は土師器焜炉である。内面には３箇所に突起が付き、両側面には径1.2㎝の孔があけられている。

ＳＫ３５〔図版９・14・19、写真図版 13〕

１－２区第１面で検出された土坑である。この部分は調査地内では低い部分にあたる。南北140㎝以上、東西60㎝以上、深さ26㎝である。西側は調査区外で、南部は撹乱により破壊されている。南北は調査区外である。埋土上層は整地により埋め戻された後、周囲を含めて全体がＳＫ３７の埋土と同様な廃棄物で覆われている。埋土最下層から磁器碗（50）、施釉陶器碗（134）・壷（51）、埋土中層からミニチュア人形（52）が出土している。52はＳＫ３７と同一層の可能性がある。

50は肥前系の磁器碗で、18世紀のくらわんか手のものと思われる。134は肥前系の施釉陶器碗である。内面に禾目状の文様が入れられていることから、現川焼と考えられる。17世紀後半～18世紀前半頃のものと思われる。51は丹波系の施釉陶器水屋甕で、17世紀前半のものと考えられる。52はミニチュア人形で底部に径６㎜の穴が穿たれている。

ＳＫ３６〔図版 10、写真図版７〕

１－１・４区第２面で検出された土坑である。東西1.5ｍ以上、深さ20㎝である。南北東は調査区外である。埋土から遺物は出土していない。土坑を覆う整地層をＳＫ３４が切っていることから、ＳＫ３４よりは古い。

ＳＫ３７〔図版９・14・19・22、写真図版６・13・14・19〕

１－１・３区第２面で検出された土坑である。幅70㎝以上で、東に向けて地形が下がっている。北側は撹乱及び調査区外で、南側は全体的に地形が下がっているため、自然に消滅している。埋土には遺物が多く埋め立てられ、最終的には廃棄坑として利用されている。埋め立て層は地形の下がった部分まで続いている。位置的には屋敷境界の東端付近に位置し、区画溝の西側の肩の部分の可能性が考えられる。

埋め立て層からは染付磁器碗（135～139）・皿（140～143）・杯（144～147）、磁器皿（148）、クロム青磁碗（149）、施釉陶器鍋（53）・蓋（150）、無釉陶器油壷（54）、土師器焙烙（55）・小皿（56）・焜炉（57）・焼台（58～61）、ワインボトル（62）、軒平瓦（63・64）、煙管（M1）、鉄釘（M12）が出土している。19世紀代の遺物が多く、銅板転写の染付磁器碗（137・138）・皿（140）やクロム青磁碗（149）、明治期と考えられる焼台（58～61）などが出土していることから明治期に埋め立てられたものと考えられる。

135は瀬戸系の染付磁器碗である。19世紀以降のものと思われる。136は肥前系の染付磁器碗である。肥前Ⅳ期（18世紀後半）頃のものである。139は肥前系の染付磁器碗である。肥前Ⅴ期（19世紀前半）頃のものである。141は肥前系の染付磁器皿である。肥前Ⅱ期（17世紀前半）のものと考えられる。142は肥前系の染付磁器皿である。肥前Ⅴ期（19世紀前半）のものと考えられる。143は瀬戸系の染付磁器皿で、19世紀中頃のものと考えられる。144～146は瀬戸系の染付磁器杯である。19世紀以降のものである。53は京焼系の施釉陶器鍋である。体部外面にトビカンナが施されている。54は丹波系の無釉陶器油壷である。体部外面上端に突帯が廻り、突帯の内側に孔が１箇所穿たれている。19世紀前半のものと考えられる。55は土師器焙烙である。56は土師器小皿である。柿釉が施されている。57は土師器焜炉である。脚部外面に「へコ」の刻印が押されている。58～61は土師器焼台である。内面には断面三角の台が、放射状に３方へ延びるように付けられている。青色のガラス質の釉が11～3.5㎜程度の厚さで溜まっている。同様な焼台は明石市樽屋町で確認された北條窯から出土している。北條窯は明治16年（1883）以降、明治43年（1910）以前に存在したと考えられている（稲原1998）。

Ｐ０８〔図版 14・19、写真図版 14〕

１－13区第１面で検出されたピットである。直径は20㎝、深さは28㎝である。埋土から染付磁器碗（151）、白磁杯（65）が出土している。

包含層〔図版 16・17・20、写真図版 16 ～ 18〕

包含層からの出土遺物はＳＫ３４・３６の埋土を含む整地層（暗灰色土・黄色土）から出土したものが多い。黄色の整地層は暗灰色の整地層の上を覆う整地層である。

79～94・153～157はＳＫ３４・３６の埋土を含む暗灰色の整地層から出土したものである。

153は肥前系の染付磁器碗である。79は丹波系の施釉陶器徳利である。80・81・154は京焼系の施釉陶器蓋である。154は155の施釉陶器壷とセットである。156・157は京焼系の施釉陶器土瓶である。82は施釉陶器不明である。表面は褐釉が施されている。83は施釉陶器茶入である。外面には黒釉が施されている。84は無釉陶器火鉢である。胎土は赤地に白土が練り込まれている。85・86は土師器小皿である。85は柿釉が施されている。87・88は土師器灯明台である。柿釉が施されている。89は土師器焙烙である。底部と口縁部の境が突出している。94は熨斗瓦である。左端には分割界線が認められ、割熨斗であることがわかる。

95～102・158～165はＳＫ３４・３６の埋土を含む黄色の整地層から出土したものである。

158は肥前系の染付磁器の広東碗である。肥前Ｖ期（19世紀前半）のものと考えられる。159・160は瀬戸系の染付磁器碗で、19世紀前半頃のものと考えられる。163は肥前系の染付磁器皿で、肥前Ｖ期（19世紀前半）のものと考えられる。164は肥前系の染付磁器皿である。見込みには手描五弁花文、高台内に「大明成化年製」の銘が入れられている。肥前Ⅳ期（18世紀後半）のものと考えられる。95は京焼系の施釉陶器碗である。96～99は土師器小皿である。柿釉が施されている。100～102は土師器灯明台である。柿釉が施されている。

103～109・166～168はその他の包含層から出土したものであるが、103・105～107は下層面掘削時に出土したものである。

166は色絵磁器練歯磨容器で、高台内に「鹿印練歯磨」の銘が入れられている。鹿印練歯磨は花王の前身である長瀬富郎商店により明治26年（1893）以降に販売されたものである。168は肥前系の施釉陶器鉢で、二彩唐津である。103は瀬戸美濃系の施釉陶器碗である。105は丹波系の無釉陶器擂鉢で、ⅣＢ類（18世紀後葉～末）である。106・107は土師器小皿で、17世紀のものと考えられる。

３．金属製品〔図版22、写真図版19〕

M1は銅製の煙管の雁首で、側面に合わせ目が認められる。ＳＫ３７から出土した。

M2は銅製の煙管の吸口で、合わせ目が認められないことから鋳造製品と思われる。ＳＫ２０の上層から出土した。

M3は銅製の飾金具である。魚々子地に唐草文が毛彫りされている。西部の下層整地層から出土した。

M4は鉄刀である。身幅は2.4㎝であることから、短刀の可能性が考えられる。表裏両面に骨・木質が付着している。ＳＫ２０の上層から出土した。

M5は庖丁である。刃部は２等辺三角形を呈し、細い柄が付いている。刃部は長さ8.95㎝、幅3.3㎝である。柄には木質が残存している。東部の黄色整地層から出土した。

M6～M13は鉄釘である。頭部を平たくつぶして折り曲げたものが多く、断面は１辺４㎜前後のものが多い。M13は大型の釘で、頭部はそのまま折り曲げている。幅14㎜、厚６㎜である。

M14は棒状の鉄製品で、断面は径5.5㎜の円形である。形状からすると火箸の可能性が高い。西部の第３面直上から出土したものである。

M15は鉄滓である。表面には径３㎜以下の気泡と木炭の痕跡が認められる。重量は95.8ｇである。西部の下層整地層から出土したものである。

第４章　まとめ

第１節　遺構の変遷

大きくは明石城以前、17・18世紀、19世紀の３つに分かれる。

明石城以前

明石城以前については西部のＳＫ１７から古墳時代の須恵器蓋杯（１）、ＳＫ２６から須恵器小片、Ｐ３１から中世の須恵器碗（14）、Ｐ３２から中世後期の土師器羽釜（15）、ＳＤ０１からは口禿げの白磁皿が出土している。これらの遺構は調査区の北西部のみで検出され、小規模な土坑やピット、鋤溝程度の浅い溝などである。その他、近世の遺構に混入したものや包含層から出土したものに土師器碗（12）、須恵器杯Ａ（13）、須恵器捏鉢（77・78）、瀬戸美濃焼皿（72）などがある。

明石城の南西側には自然堤防状の微高地が存在し、鷹匠町などで遺構や遺物が検出されている。今回検出された遺構もこの古墳時代～中世の集落の一角を成しているものと思われる。

17・18 世紀

元和６年（1620）に明石城が完成し、その西、南、東側には家臣の武家屋敷が設けられている。このうち、今回の調査地は南西部の一角に位置している。今回調査を行った屋敷地は１軒が当初東西約38m、南北約60mの敷地で、今回の調査地は屋敷地の中央東部にあたる。『明石家中之図』（平崎旭氏蔵）によると北側に門を開いていることが分かる。

調査区北西部では礎石群が検出されている。礎石の検出レベルに差があることから、江戸中期以前から幕末以降まで長期間建物が存在したものと思われる。西側の道から22mほどの位置であり、敷地の中央付近に建物が建てられていたようである。

17世紀の遺構にはＳＫ２０、ＳＫ２１、ＳＫ２７、18世紀の遺構にはＳＫ３０、ＳＫ１２、ＳＫ３５などがある。ＳＫ２７は埋桶と考えられ、ＳＫ２０は建物の南側に流れた洪水の跡の可能性が考えられる。建物に隣接した部分に埋桶などの土坑が設けられ、それより東側はわずかに小規模な不整形土坑が存在するのみで、空閑地であったと考えられる。

東端部は幕末には屋敷境の溝と推定されるＳＫ３７が存在するが、いつ頃まで遡るのかは不明で、当初は南東側全体が低く下がっていたようである。

19 世紀

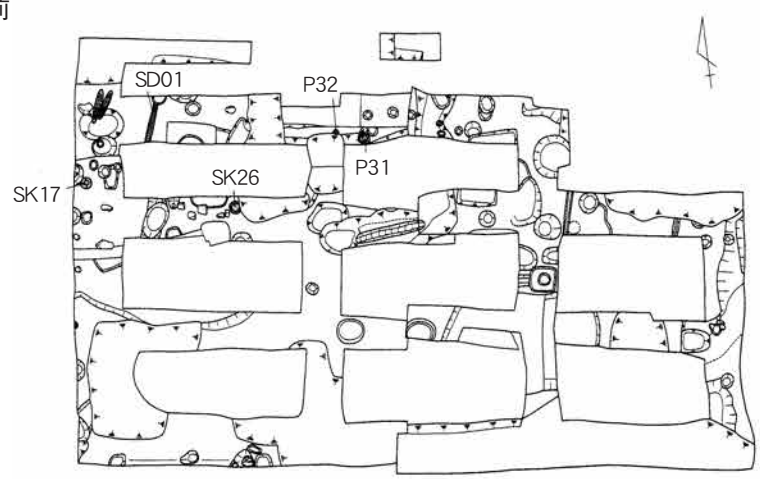
屋敷地は幕末頃に南北に分割され、今回の調査地はその内の北側（南北約30m）にあたる。

調査区北西部の礎石群は幕末以降と考えられるものも存在し、依然としてこの部分に建物が存在したと考えられる。

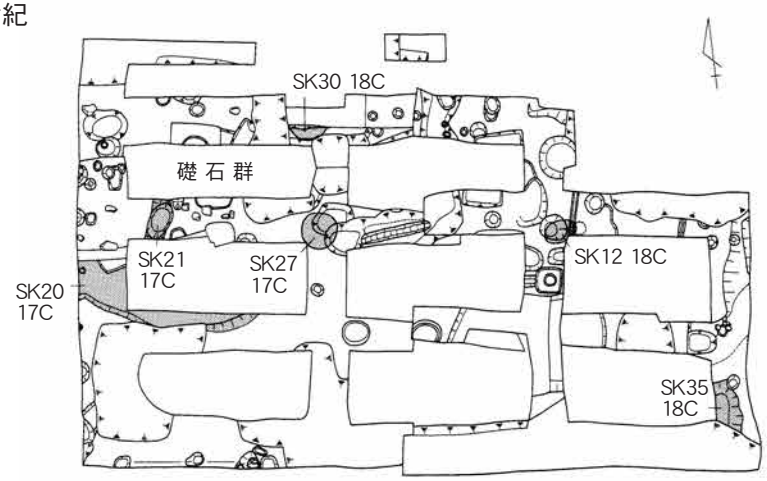
調査区南端部で検出された、柵列ＳＡ０１は敷地の分割によって造られた塀などの施設に関連するものと思われる。

敷地が半減したためか調査区東部でＳＫ３４（幕末期）、ＳＫ３３（明治期）など大型の廃棄土坑が認められる。また、東端部の屋敷境の溝と推定されるＳＫ３７は明治期に埋め立てられてしまっている。

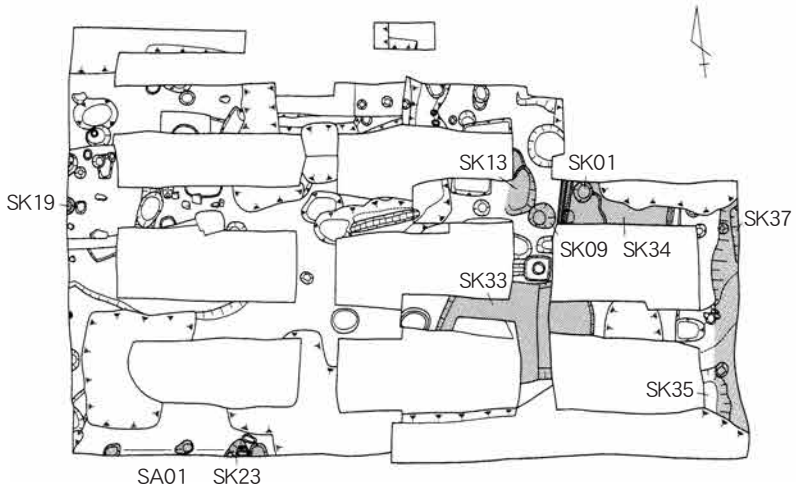
明石城以前



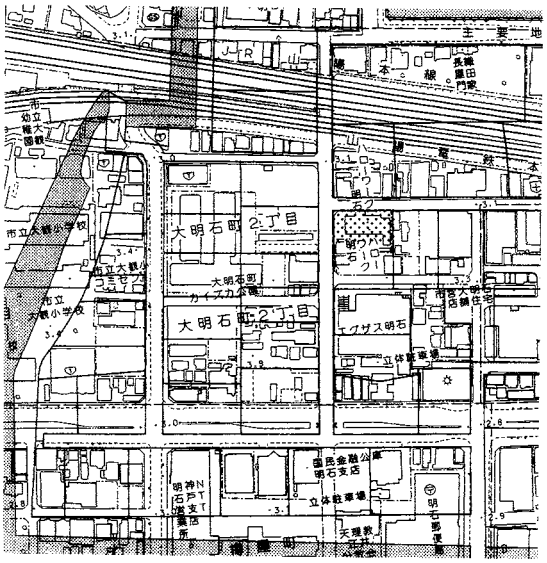
17・18 世紀

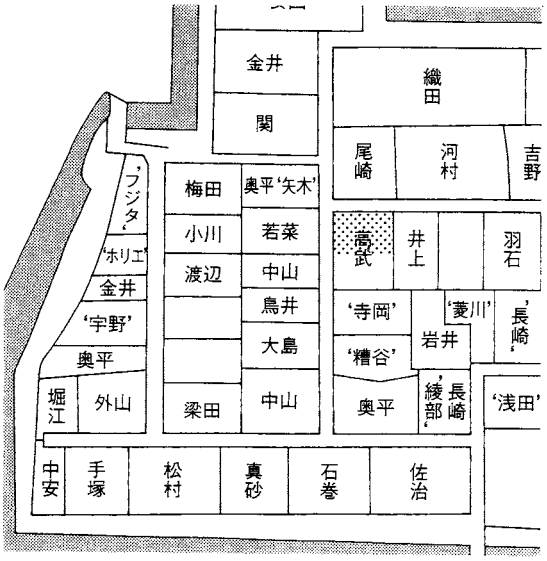


19 世紀

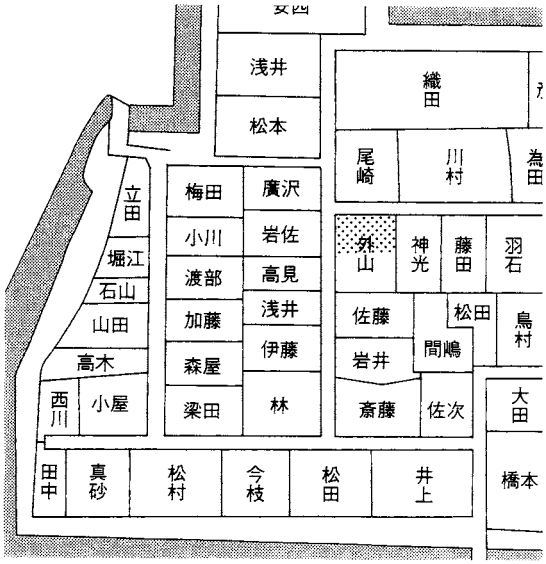


第５図　遺構の変遷

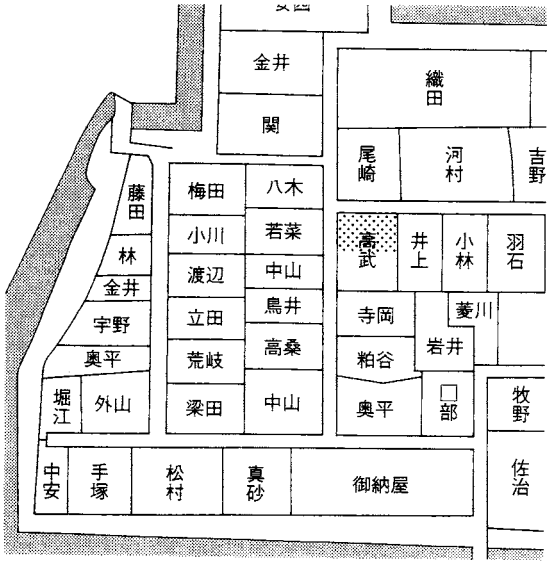




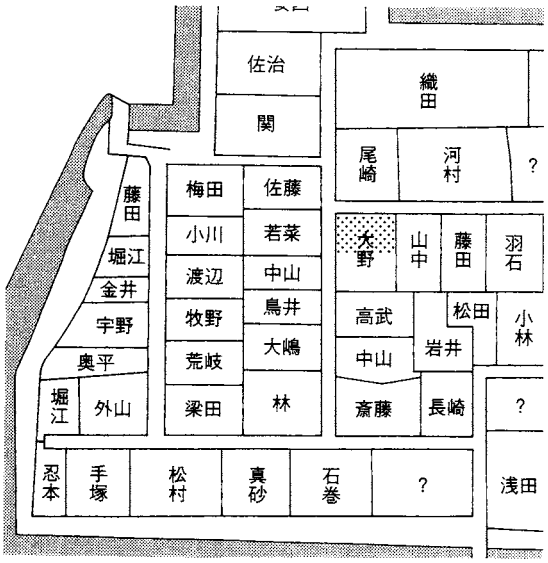
『明石町旧全図』



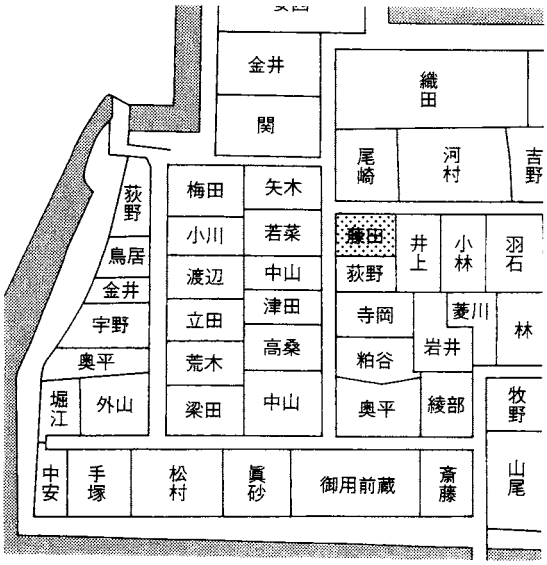
『明石御廓内之図』



『明石家中之図』



『明石城侍屋敷絵図』



『文久年間明石町之図』

第６図　居住者の変遷

第２節　居住者の変遷

武家屋敷の居住者については複数の絵図が存在することによりある程度判明する。ただし、越前松平家が転封した天和２年（1682）以前については小笠原家、戸田松平家、大久保家、藤井松平家、本多家と比較的短期間で城主が替わり、屋敷の居住者が記載される絵図も大久保期と藤井松平期の各１点しか存在しない（1）。天和２年（1682）以降の越前松平期については複数の絵図が存在することにより、その居住者の変遷をしることができ（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2003）、さらに関係史料によりその人物の地位もある程度判明する（2）。

大久保期（1639 ～ 1649）

「播州明石城図」では「寺嶋勘右衛門」という人物であることがわかる（明石城史編さん実行委員会2000年）。ただし、この人物がどのような人物であったかはよく分からない。

越前松平期（1682 ～ 1871）

①享保（1716～1735）頃に編纂された『明石記』に収載された『明石記御廓内之図』（大井高志氏蔵）によると「外山登」と記されている（明石市立文化博物館1992）。享保16年（1731）の『御家中知行高並役附』には御者頭格で禄高200石の「外山頼母」と御近習で20俵４人扶持の「外山右膳」という人物が確認できる。武家屋敷内では外山家の屋敷は１カ所しか確認できないことから禄高200石の「外山頼母」の屋敷と考えられる。

②『明石城侍屋敷絵図』（荻野・大久保氏蔵）には「大野権之丞」「百五十石」と記載されている。当絵図には他の箇所に禄高400石の「大野右近」と禄高60石の「大野百助」がみられ、大野家には複数系統の家が存在する。享保の『御家中知行高並役附』で禄高が近いのは御番組の「大野伝九郎」（150石）と隠居の「大野治部左衛門」（150石）、文政13年（1830）の『家中本知行之分』では「大野管左衛門」（150石）と「大野治部左衛門」（100石）で、いずれかの系統にあたるものと思われる。

③文久３年（1863）の年記を有する『明石町旧全図』（神戸市立図書館蔵）では「高武弘人」、『明石家中之図』（平崎旭氏蔵）では「高武」と記されている（矢守1982、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2003）。『明石城侍屋敷絵図』（荻野・大久保氏蔵）では南隣の屋敷地に「高武弘人」「百七十石」と記載されており、隣から移動したことが分かる。文政の『家中本知行之分』でも「高武半左衛門」の禄高は170石である。「高武弘人」を名乗る人物には「高武弘人久正」と「高武弘人久諶」が確認できる。「高武弘人久正」は雲晴寺に所在する墓碑銘によると天保14年（1843）に没した人物である。「高武弘人久諶」は『明石藩旧臣録』の文久元年（1861）～元治元年（1864）にその名が見られる（木村2004）。

④『文久年間明石町之図』（『明石郷土史料』収載）、『明石城図』（浄行寺蔵）では屋敷地が南北に分割され北側は「藤田」、南側は「荻野」と記されている。調査地は北側の「藤田」家の屋敷地内に含まれている。この段階では藤田家の屋敷は１箇所のみである。遡る『明石町旧全図』と『明石家中之図』では藤田家は別の箇所の１箇所のみで、『明石城侍屋敷絵図』の記載からするとこの箇

所は「藤田柳眠」（禄高100石）の屋敷地であることが分かる。『明石城侍屋敷絵図』では別の箇所に「藤田此右衛門」（禄高100石）が認められる。これらのことからすると、この時期には「藤田柳眠」もしくは「藤田此右衛門」の子孫の屋敷地であることが推定される。

このように、越前松平期においては外山家・大野家・高武家・藤田家と変遷し、禄高200～100石の中クラスの家臣の屋敷地であったことが分かる。

注

（１）藤井松平期の絵図には今回の調査地の居住者名は記されていない。

（２）越前松平期の家臣の関連史料については兵庫県立図書館宮本博氏に多大なご教示を得た。

参考文献

明石市立文化博物館1992年　『明石城の歴史と文化』
明石城史編さん実行委員会2000年　『講座明石城史』
稲原昭嘉1998年　「明石城下町発掘調査で確認した近代窯（北條窯）」『歴史と神戸』37巻5号
木村英昭2004年　『明石藩旧臣録』
野田猪左雄1929年　『明石郷土史料』
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所1992年　『明石城武家屋敷跡』
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2003年　『明石城武家屋敷跡Ⅱ』
矢守一彦1982年　『日本城下町絵図集　近畿編』

付表１　土器・陶磁器一覧表

番号	種別	器種	地区		遺構	層位	法量（cm）			備考
							口径	器高	底径	
001	須恵器	蓋杯	西部	2-29	SK17		-	-	-	外面に回転ヘラケズリ
002	白磁	皿	西部	2-29	SK19		(9.5)	(2.35)	(5.6)	畳付露胎
003	無釉陶器	擂鉢	西部	2-29	SK20	上層	(37.9)	(5.2)	-	擂目１単位 13 本
004	土師器	焙烙	西部	2-29	SK20	上層	(20.8)	(4.6)	-	
005	土師器	焙烙	西部	2-29	SK20	下層	(24.2)	(7.0)	-	底部外面に平行タタキ
006	瓦	丸瓦	西部	2-29	SK21		長（12.35）	幅（7.9）	厚（5.8）	凹面はコビキＢ痕
007	無釉陶器	擂鉢	西部	2	SK23		(28.6)	(9.3)	-	擂目１単位 11 本、 体部外面は板ナデ
008	無釉陶器	擂鉢	西部	2	SK23		(34.85)	13.4	(16.35)	擂目１単位 10 本、体部外面・底部外面は板ナデ
009	無釉陶器	擂鉢	西部	2	SK23		(31.9)	12.0	(14.4)	擂目１単位 11 本、体部外面は 板ナデ・底部外面は砂付着
010	無釉陶器	擂鉢	西部	2-20	SK27		(26.5)	(6.1)	-	擂目１単位 10 本、体部外面は 回転ナデ
011	瓦	熨斗瓦	西部	3	SK28	掘方	長（7.8）	幅（9.65）	厚（2.3）	凹面に１単位６本の櫛目
012	土師器	碗	西部	3	SK28	掘方	(12.8)	(3.7)	-	
013	須恵器	杯Ａ	西部	3	SK28	掘方	-	-	-	底部外面はヘラ切り未調整
014	須恵器	底部	西部	3	Ｐ 31		-	-	-	底部外面は回転糸切り
015	土師器	羽釜	西部	3	P32		(23.0)	(3.0)	-	
016	白磁	皿	西部	3	SD01		-	-	-	口禿げ
017	瓦	井戸瓦	西部	3	SE01		長 25.35	幅 25.2	厚 3.6	
018	土師器	小皿	東部	1-4	SK01		7.5	1.25	3.9	底部は回転糸切り､内面にヘラ書き？
019	土師器	小皿	東部	1-4	SK01		(7.6)	(1.3)	3.75	底部は回転糸切り、口縁部にスス付着
020	土師器	小皿	東部	1-4	SK01		(9.2)	(1.5)	3.85	底部は回転糸切り、内面・口縁部外面に柿釉、口縁部にスス付着
021	土師器	小皿	東部	1-4	SK01		9.15	1.6	4.0	底部は回転糸切り、内面・口縁部外面に柿釉、口縁部にスス付着
022	施釉陶器	蓋	東部	1-4	SK01		7.8	1.95	4.3	下面・上端部露胎
023	施釉陶器	蓋	東部	1-4	SK01		15.0	3.7	-	縁端部のみ露胎
024	土師器	焼塩壺蓋	東部	1-10	SK13		6.85	1.2	7.5	下面に布目痕
025	施釉陶器	鍋	東部	1-9	SK13		(16.3)	(8.3)	(6.0)	体部外面下位・底部外面は露胎
026	瓦	桟瓦	東部	1-10	SK13		長（14.15）	幅（15.9）	厚 1.55	
027	瓦	丸瓦	東部	1-10	SK13		長（17.5）	幅（12.3）	厚 1.3	凹面布目 13 本 /1cm
028	瓦	丸瓦	東部	1-10	SK13		長（15.4）	幅 12.8	厚 1.35	凹面布目後内叩き
029	施釉陶器	甕	東部	1-11	SK33		(26.9)	35.0	(16.9)	内面は灰釉、外面は赤土部に灰釉流し掛け、底部外面はナデ、底部周縁に砂付着
030	施釉陶器	蓋	東部	1-11	SK33		11.85	4.3	-	つまみ・縁部は露胎
031	施釉陶器	秉燭	東部	1-5,11	SK33		6.4	3.85	3.4	体部外面下端・底部外面は露胎、切り離しは回転糸切り
032	施釉陶器	不明	東部	1-11	SK33		(3.35)	8.75	4.95	脚部内面は露胎
033	無釉陶器	擂鉢	東部	1-11	SK33		(30.9)	10.75	(15.55)	擂目１単位 15 本、体部外面は回転ナデ後板ナデ、底部外面は板ナデ・砂付着
034	土師器	小皿	東部	1-11	SK33		9.5	1.7	4.0	底部は回転糸切り、内面・口縁端部外面に柿釉、口縁部にスス付着
035	土師器	小皿	東部	1-11	SK33		9.2	1.8	4.0	底部は回転糸切り、内面・口縁端部外面に柿釉、口縁部にスス付着
036	土師器	焜炉	東部	1-11	SK33		(14.8)	(9.9)	-	内面に１単位８本の櫛目、外面に柿釉
037	土師器	焜炉	東部	1-2,3	SK33		-	(9.5)	(11.5)	内面に１単位８本の櫛目
038	土師器	焜炉	東部	1-11	SK33		-	(12.1)	(11.6)	
039	土師器	焜炉	東部	1-5,11	SK33		-	(8.1)	(19.8)	体部外面・脚部外面は柿釉、底部回転糸切り
040	土師器	焜炉	東部	1-11	SK33		-	(13.2)	18.1	体部外面・脚部外面は柿釉、底部回転糸切り

番号	種別	器種	地区		遺構	層位	法量（cm）			備考
							口径	器高	底径	
041	土師器	焜炉	東部	1-5,11	SK33		-	(4.5)	(19.5)	体部外面・脚部外面は柿釉、底部回転糸切り
042	土師器	焜炉	東部	1-11	SK33		長（4.05）	幅（9.15）	厚（1.8）	外面は柿釉
043	土師器	焜炉蓋	東部	1-11	SK33		縦（7.0）	横 11.1	厚 2.1	外面は柿釉
044	土師器	焼台	東部	1-11	SK33		9.0 × 8.85	2.25	-	外面は布目
045	瓦質土器	羽釜	東部	1-11	SK33		(19.2)	(8.8)	-	内外面とも回転ナデ
046	瓦質土器	羽釜	東部	1-11	SK33		(19.6)	(9.0)	-	内面は回転ナデ、口縁部外面はヘラミガキ、体部外面はスス付着
047	ガラス	牛乳瓶	東部	1-11	SK33		(2.45)	12.25	4.25	側面に合わせ目、口縁部内面は磨りガラス状
048	瓦	軒丸瓦	東部	1-11	SK33		長（9.6）	-	厚 1.2	凹面に内叩き
049	瓦	軒丸瓦	東部	1-11	SK33		長（3.4）	幅（12.65）	-	
050	磁器	碗	東部	1-2	SK35	最下層	-	(3.05)	(4.45)	畳付は露胎、見込み・高台内に砂付着
051	施釉陶器	甕	東部	1-2	SK35	最下層	(24.0)	(5.8)	-	表面赤土部塗布後、外面・体部内面は施釉
052	土製品	ﾐﾆﾁｭｱ人形	東部	1-2	SK35	中層	長（3.8）	幅 4.1	厚 2.2	
053	施釉陶器	鍋	東部	1-2,3	SK37		17.3	10.2	(7.9)	体部内面は透明釉、体部外面上半は薄い鉄釉、体部外面下半・底部外面は回転ヘラケズリ
054	無釉陶器	油徳利	東部	1-2	SK37		1.9	(14.35)	-	外面に朱泥塗布
055	土師器	焙烙	東部	1-2,3	SK37		(33.4)	(5.05)	(32.7)	口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面は板ナデ
056	土師器	小皿	東部	1-2,3	SK37		(6.4)	1.3	3.7	底部は回転糸切り、内面・口縁端部外面に柿釉、口縁部にスス付着
057	土師器	七厘	東部	1-2,3	SK37		長（7.9）	幅（6.9）	厚（1.9）	外面に柿釉
058	土師器	焼台	東部	1-2,3	SK37		11.1 × 11.35	2.4	-	外面に布目
059	土師器	焼台	東部	1-2,3	SK37		(13.3) × (8.3)	2.7	-	外面に布目
060	土師器	焼台	東部	1-2,3	SK37		(5.55) × (6.5)	(1.9)	-	外面に布目
061	土師器	焼台	東部	1-2,3	SK37		(2.85) × (2.7)	(1.65)	-	外面に布目
062	ガラス	ﾜｲﾝﾎﾞﾄﾙ	東部	1-2,3	SK37		-	(5.25)	-	
063	瓦	軒平瓦	東部	1-2,3	SK37		長 5.15	-	厚 1.4	
064	瓦	軒平瓦	東部	1-2,3	SK37		長（8.3）	-	厚 1.7	
065	白磁	杯	東部	1-14	P08		(6.7)	4.5	(2.65)	畳付のみ露胎
066	施釉陶器	碗	東部	1-10	SK12		(10.4)	6.8	(4.85)	畳付のみ露胎、見込みに針目跡
067	施釉陶器	甕	東部	1-4	SK34		25.0	32.8	16.35	内面は灰釉、外面は赤土部に灰釉流し掛け、底部にトチン跡６箇所
068	施釉陶器	徳利	東部	1-4	SK34		-	(20.3)	9.85	体部外面は黒釉、底部外面は露胎・周縁は砂付着
069	施釉陶器	行平鍋	東部	1-4	SK34		12.3	6.8	5.7	口縁部内外面・体部外面下位・底部外面は露胎、釉は透明釉、把手に「寿」刻印
070	土師器	焜炉	東部	1-4	SK34		23.9	21.7	25.0	外面は朱泥塗布、底部外面は砂付着
071	施釉陶器	皿	西部	2-24	包含層	下層整地層	(12.75)	3.0	(4.2)	畳付・高台内は露胎、見込みに砂目跡
072	施釉陶器	皿	西部	3	包含層	第２面まで	-	(1.0)	5.1	全面施釉、高台内に重ね焼き痕が認められる
073	無釉陶器	擂鉢	西部	3-20	包含層	北端撹乱	16.6	6.15	9.45	擂目１単位 12 本、体部外面上半は回転ナデ、体部外面下半・底部外面は板ナデ、底部外面砂付着
074	土師器	焙烙	西部	2-24	包含層	下層整地層	(22.4)	(6.9)	-	体部外面は平行タタキ
075	土師器	羽釜	西部	3	包含層	３面まで	(24.35)	(3.5)	-	体部内面はヨコハケ

番号	種別	器種	地区		遺構	層位	法量（cm）			備考
							口径	器高	底径	
076	須恵器	碗	西部	3	包含層	3 面まで	(15.65)	(3.6)	-	内外面とも回転ナデ
077	須恵器	鉢	西部	2-24	包含層	下層整地層	-	(3.6)	-	内外面とも回転ナデ
078	須恵器	鉢	西部	2-30	包含層	下層整地層	(13.3)	(1.55)	-	内外面とも回転ナデ
079	施釉陶器	徳利	東部	1-4	包含層	暗灰色整地層	-	(22.15)	9.0	体部外面は黒釉、底部外面は露胎
080	施釉陶器	蓋	東部	1-4	包含層	暗灰色整地層	7.5	1.6	4.55	下面は露胎
081	施釉陶器	蓋	東部	1-4	包含層	暗灰色整地層	13.7	3.3	-	縁端部のみ露胎
082	施釉陶器	不明	東部	1-4	包含層	暗灰色整地層	長 4.55	3.05	幅 4.0	褐釉、底部露胎
083	磁器	茶入	東部	1-4	包含層	暗灰色整地層	(3.5)	(1.0)	-	口縁部内面・外面は黒釉
084	無釉陶器	火鉢	東部		包含層	暗灰色整地層	(9.2)	13.45	(12.3)	口縁部外面・体部外面はヘラミガキ、底部外面・内面は回転ナデ、赤地に白色の練り込み
085	土師器	小皿	東部	1-4	包含層	暗灰色整地層	6.8	1.25	3.15	底部は回転糸切り、内面・口縁端部外面に柿釉、口縁部にスス付着
086	土師器	小皿	東部	1-4	包含層	暗灰色整地層	7.9	2.6	6.6	底部は回転糸切り
087	土師器	灯明台	東部	1-4	包含層	暗灰色整地層	(6.9)	5.3	5.25	杯部内面は柿釉、底部は回転糸切り
088	土師器	灯明台	東部	1-4	包含層	暗灰色整地層	5.5	5.1	5.0	杯部内面・口縁端部外面は柿釉、底部は回転糸切り
089	土師器	焙烙	東部	1-4	包含層	暗灰色整地層	(35.2)	(5.0)	(35.8)	口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面は外型の痕跡？
090	瓦	軒丸瓦	東部	1-4	包含層	暗灰色整地層	長（8.4）	幅 9.7	厚 0.9	丸瓦部凹面は布目後内叩き
091	瓦	軒平瓦	東部	1-4	包含層	暗灰色整地層	長（10.6）	-	厚 1.4	
092	瓦	丸瓦	東部	1-4	包含層	暗灰色整地層	長（14.3）	幅 12.5	厚 1.4	コビキＢ痕後布目
093	瓦	桟瓦	東部	1-4	包含層	暗灰色整地層	長（13.9）	幅（11.65）	厚 1.3	
094	瓦	熨斗瓦	東部	1-4	包含層	黄色整地層	長 26.6	幅（11.5）	厚 1.6	
095	施釉陶器	碗	東部	1-4	包含層	黄色整地層	(8.6)	(4.7)	(2.4)	高台部露胎
096	土師器	小皿	東部	1-4	包含層	黄色整地層	9.7	1.4	4.15	底部は回転糸切り、内面・口縁端部外面に柿釉、口縁部にスス付着
097	土師器	小皿	東部	1-4	包含層	黄色整地層	8.5	1.5	3.6	底部は回転糸切り、内面・口縁端部外面に柿釉、口縁部にスス付着
098	土師器	小皿	東部	1-4	包含層	黄色整地層	7.25	1.5	4.1	底部は回転糸切り、内面・口縁端部外面に柿釉、口縁部にスス付着
099	土師器	小皿	東部	1-4	包含層	黄色整地層	6.0	1.2	2.35	底部は回転糸切り、内面に柿釉
100	土師器	灯明台	東部	1-4	包含層	黄色整地層	6.45	5.6	(6.1)	杯部内面は柿釉、底部は回転糸切り
101	土師器	灯明台	東部	1-4	包含層	黄色整地層	(6.75)	5.65	5.3	杯部内面は柿釉、底部は回転糸切り
102	土師器	灯明台	東部	1-4	包含層	黄色整地層	6.2	5.4	5.9	杯部全面・脚部外面は柿釉、底部は回転糸切り後中央を抉る
103	施釉陶器	碗	東部	1	包含層	下層面上礫層	(11.6)	(7.8)	5.25	畳付のみ露胎、施釉は透明釉
104	施釉陶器	鉢	東部	1-1	包含層	東北隅撹乱	(22.6)	11.25	9.6	体部外面下位・底部外面は露胎、口縁部内面は部分的に露胎、施釉は透明釉
105	無釉陶器	擂鉢	東部	1	包含層	下層面上礫層	(28.0)	(3.4)	-	擂目は１単位７本以上
106	土師器	皿	東部	1-8	包含層	下層	(8.4)	(2.5)	(5.55)	底部は回転糸切り
107	土師器	皿	東部	1	包含層	下層面上礫層	(8.0)	(2.6)	(6.35)	底部は回転糸切り

番号	種別	器種	地区		遺構	層位	法量（cm）			備考
							口径	器高	底径	
108	土製品	ミニチュア土器	東部	1-8,14	包含層	上面包含層	2.85	2.4	1.65	内面・口縁部外面に柿釉、口縁部にスス付着
109	土師器	焜炉	東部	1-15	包含層	上面包含層	(16.5)	(9.2)	-	内面に１単位６本の櫛目、外面に柿釉
110	染付青磁	碗	西部	2-29	SK20	上層	(9.65)	6.85	(4.55)	畳付～高台内露胎
111	染付磁器	皿	西部	2-29	SK20	上層	(14.1)	(2.85)	(4.85)	畳付は露胎・砂付着
112	染付磁器	鉢	東部	1-4	SK01		-	(3.9)	8.8	畳付は露胎、見込み・高台内に砂付着
113	染付磁器	碗	東部	1-10	SK09		(9.8)	(3.4)	-	竹に鶴図
114	染付磁器	碗	東部	1-11	SK33		8.45	4.45	2.9	畳付は露胎、外面は牡丹唐草文
115	染付磁器	碗	東部	1-11	SK33		(10.75)	4.9	(3.6)	畳付は露胎、外面は万年青に菊図
116	染付磁器	碗	東部	1-11	SK33		(10.9)	4.9	4.1	畳付は露胎、見込みに目跡５箇所、文様は銅板転写
117	染付磁器	碗	東部	1-11	SK33		11.5	4.75	3.35	畳付は露胎、文様は銅板転写
118	染付磁器	碗	東部	1-11	SK33		(9.9)	3.75	(3.2)	畳付は露胎、文様は銅板転写
119	染付磁器	碗	東部	1-11	SK33		(8.45)	4.1	2.9	畳付は露胎
120	染付磁器	蓋	東部	1-5,11	SK33		9.45	2.45	-	つまみ頂部は露胎
121	染付青磁	蓋	東部	1-11	SK33		(9.45)	3.8	3.7	つまみ頂部は露胎
122	染付磁器	皿	東部	1-11	SK33		(12.9)	2.45	(7.55)	畳付は露胎、文様は銅板転写
123	染付磁器	皿	東部	1-11	SK33		12.55	3.1	7.4	蛇の目凹形高台、文様は銅板転写
124	染付磁器	皿	東部	1-11	SK33		(29.55)	3.9	(15.8)	畳付は露胎
125	染付青磁	鉢	東部	1-11	SK33		(26.6)	(8.75)	(12.45)	畳付は露胎
126	染付磁器	鉢	東部	1-11	SK33		-	(6.55)	8.3	蛇の目凹形高台、文様は型紙刷り
127	染付磁器	鉢	東部	1-11	SK33		-	(7.2)	(7.45)	畳付・内面中位以下は露胎、文様は銅板転写
128	染付磁器	水滴	東部	1-11	SK33		1.8	4.15	6.15 × 6.15	側面１面のみ露胎、底部外面に布目痕
129	色絵磁器	蓋	東部	1-16	SK33		(9.6)	2.8	-	つまみ上端のみ露胎、外面は呉須で松風景図のプリントの後黄・朱で加筆、縁端部は口銹
130	色絵磁器	鉢	東部	1-11	SK33		10.3	8.0	7.65	口縁端部内面・畳付は露胎、文様は銅板転写、唐草文は緑釉
131	磁器	鉢	東部	1-16	SK33		(15.2)	8.1	7.45	畳付は露胎
132	色絵磁器	皿	東部	1-11	SK33		9.2	2.6	4.95	畳付は露胎
133	陶胎染付	鉢	東部		SK33		(26.05)	9.5	12.5	畳付は露胎
134	施釉陶器	碗	東部	1-2	SK35	最下層	(10.65)	(5.05)	(4.0)	畳付は露胎、見込み蛇の目釉はぎ・砂付着
135	染付磁器	碗	東部	1-2,3	SK37		(10.85)	5.6	(4.9)	畳付は露胎
136	染付磁器	碗	東部	1-2	SK37		10.1	(5.45)	-	
137	染付磁器	碗	東部	1-2,3	SK37		(10.2)	4.45	(3.2)	畳付は露胎、文様は銅板転写
138	染付磁器	飯茶碗	東部	1-2	SK37		(11.5)	4.75	(3.65)	畳付は露胎、文様は銅板転写
139	染付磁器	碗	東部	1-2,3	SK37		14.6	7.1	(5.5)	畳付は露胎
140	染付磁器	皿	東部	1-2,3	SK37		(21.2)	3.5	(11.0)	畳付は露胎、文様は銅板転写
141	染付磁器	皿	東部	1-2,3	SK37		-	(1.5)	(6.6)	畳付は露胎・砂付着
142	染付磁器	皿	東部	1-2,3	SK37		(10.05)	2.35	(6.2)	畳付は露胎
143	染付磁器	皿	東部	1-2,3	SK37		10.35	10.8	6.35	畳付は露胎、文様は型紙刷り
144	染付磁器	杯	東部	1-2,3	SK37		(8.6)	4.3	3.25	畳付は露胎
145	染付磁器	杯	東部	1-2,3	SK37		8.45	3.85	2.8	畳付は露胎、口縁端部は口銹、文様は銅板転写
146	染付磁器	杯	東部	1-2,3	SK37		8.9	4.85	(3.4)	畳付は露胎、口縁端部は口銹、文様は虎文スタンプ後呉須
147	染付磁器	酒杯	東部	1-2,3	SK37		(6.4)	4.55	2.6	畳付は露胎

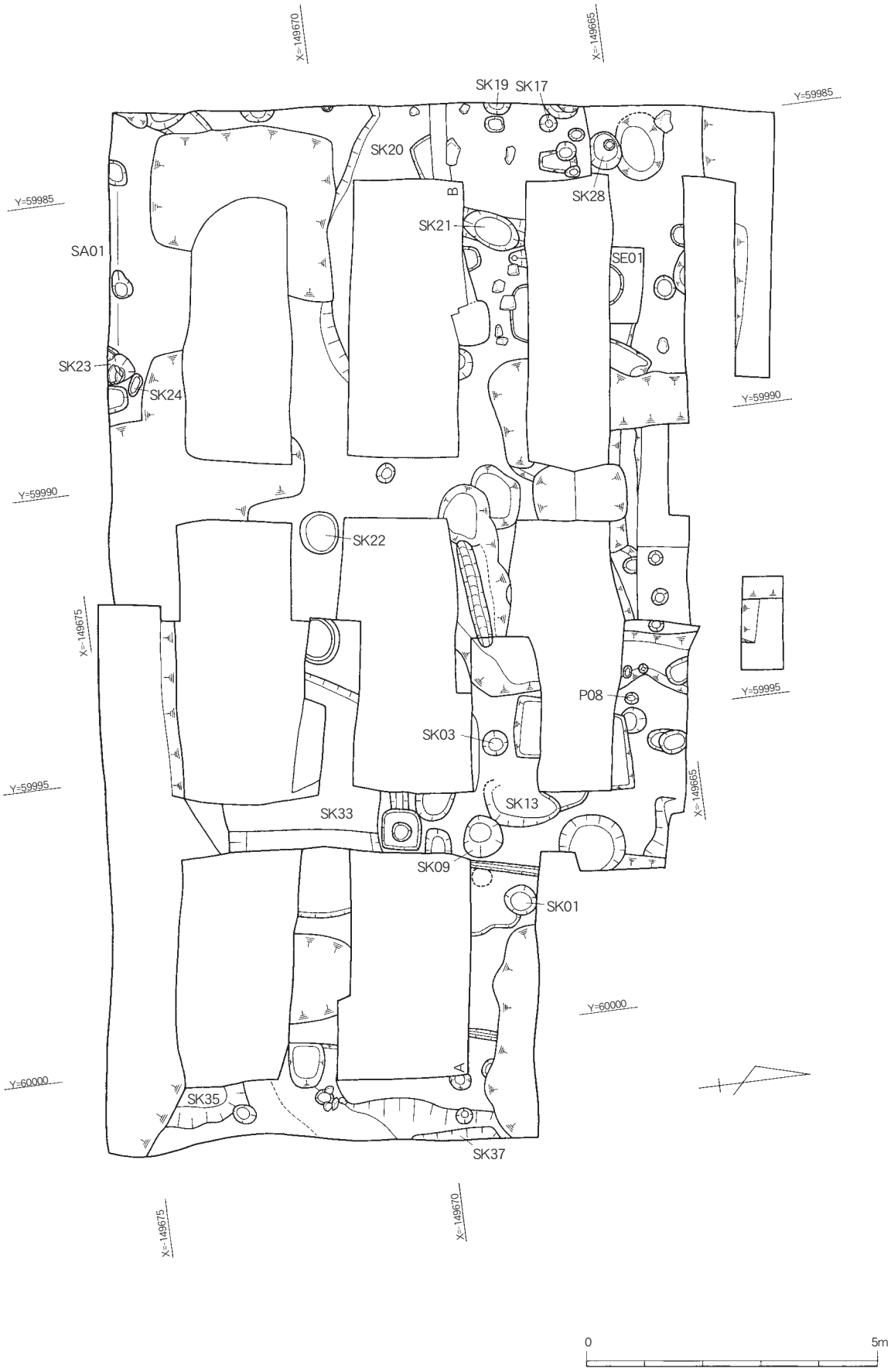
番号	種別	器種	地区		遺構	層位	法量（cm）			備考
							口径	器高	底径	
148	磁器	皿	東部	1-2,3	SK37		(13.0)	(3.75)	(5.1)	畳付は露胎、見込み蛇の目釉はぎ、白磁胎に鉄釉施釉
149	クロム青磁	筒型碗	東部	1-2,3	SK37		(6.65)	7.5	(4.25)	畳付は露胎・砂付着
150	施釉陶器	蓋	東部	1-2,3	SK37		8.35	3.8	-	下面は露胎、文様は鉄釉・タンパン
151	染付磁器	碗	東部	1-14	P08		(10.9)	(4.5)	-	
152	施釉陶器	蓋	東部	1-4	SK34		8.7	3.6	-	下面は露胎、文様は白泥
153	染付磁器	鉢	東部	1-4	包含層	暗灰色整地層	(12.15)	(5.0)	-	
154	施釉陶器	蓋	東部	1-4	包含層	暗灰色整地層	5.6 × 5.6	1.9	-	下面は露胎、亀は褐釉
155	施釉陶器	壺	東部	1-4	包含層	暗灰色整地層	(6.2)	(8.35)	-	口縁部内面・外面は施釉、亀は貼花・褐釉、流水は白泥で盛り上げた上に黒釉・青釉・緑釉で着色
156	施釉陶器	土瓶	東部	1-4	包含層	暗灰色整地層	(9.2)	14.5	7.8	内面・口縁端部・体部外面下位・底部外面は露胎、文様は白泥・鉄釉
157	施釉陶器	土瓶	東部	1-4	包含層	暗灰色整地層	(9.9)	(14.65)	(8.6)	内面・口縁端部・体部外面下位・底部外面は露胎、内面上位の一部のみ施釉、文様は白泥・鉄釉
158	染付磁器	碗	東部	1-4	包含層	黄色整地層	11.2	6.55	6.45	畳付は露胎
159	染付磁器	碗	東部	1-4	包含層	黄色整地層	10.65	5.7	4.4	畳付は露胎
160	染付磁器	碗	東部	1-4	包含層	黄色整地層	(9.5)	(4.65)	(3.5)	畳付は露胎
161	染付磁器	蓋	東部	1-4	包含層	黄色整地層	5.1	1.2	-	縁端部は露胎
162	染付磁器	鉢	東部	1-4	包含層	黄色整地層	(14.9)	(6.15)	-	
163	染付磁器	皿	東部	1-4	包含層	黄色整地層	(26.6)	(4.75)	(15.0)	畳付は露胎、高台内に針目跡
164	染付磁器	皿	東部	1-4	包含層	黄色整地層	(30.6)	(4.85)	18.1	畳付は露胎、高台内に針目跡
165	施釉陶器	蓋	東部	1-4	包含層	黄色整地層	8.35	3.1	-	下面は露胎
166	色絵磁器	煉歯磨容器	東部	1	包含層	下層面上礫層	(4.0)	4.1	(3.7)	畳付・口縁端部は露胎、文様は緑釉
167	染付磁器	小杯	東部	1	包含層	下層面上礫層	(7.8)	(4.1)	-	
168	施釉陶器	鉢	東部	1-8	包含層	下層	(27.45)	(7.3)	(10.65)	体部外面下位・高台部は露胎、見込みは蛇の目文・砂目跡、文様は鉄釉・緑釉の二彩

付表２　金属製品一覧表

番号	種別	器種	地区		遺構	層位	法量（cm）			備考
							長	幅	厚	
M01	銅製品	煙管（雁首）	東部	1-2,3	SK37		(7.1)	(0.95)	(0.95)	
M02	銅製品	煙管（吸口）	西部	2-29	SK20	上層	3.5	1.05	1.0	
M03	銅製品	飾金具	西部	2-24	包含層	下層整地層	5.6	1.75	0.05	
M04	鉄製品	刀	西部	2-29	SK20	上層	(7.8)	3.45	0.45	
M05	鉄製品	包丁	東部	1-4	包含層	黄色整地層	15.15	3.35	0.65	
M06	鉄製品	釘	西部	2-24	包含層	下層整地層	6.8	1.1	0.45	
M07	鉄製品	釘	西部	3	SK28	掘方	4.3	0.85	0.7	
M08	鉄製品	釘	西部	2-29	SK20	下層	6.75	1.35	0.65	
M09	鉄製品	釘	東部	1-11	SK33		(4.6)	0.75	0.65	
M10	鉄製品	釘	西部	2-24	包含層	下層整地層	4.1	0.95	0.5	
M11	鉄製品	釘	東部	1-4	SK01		4.85	0.9	1.0	
M12	鉄製品	釘	東部	1-2,3	SK37		6.45	3.25	1.2	
M13	鉄製品	釘	東部	1-4	包含層	暗灰色整地層	6.6	1.4	1.45	
M14	鉄製品	不明	西部	3	包含層	3 面直上	14.4	0.55	0.55	
M15	鉄製品	鉄滓	西部	2-30	包含層	下層整地層	6.3 × 5.5	-	3.2	重量 95.8g

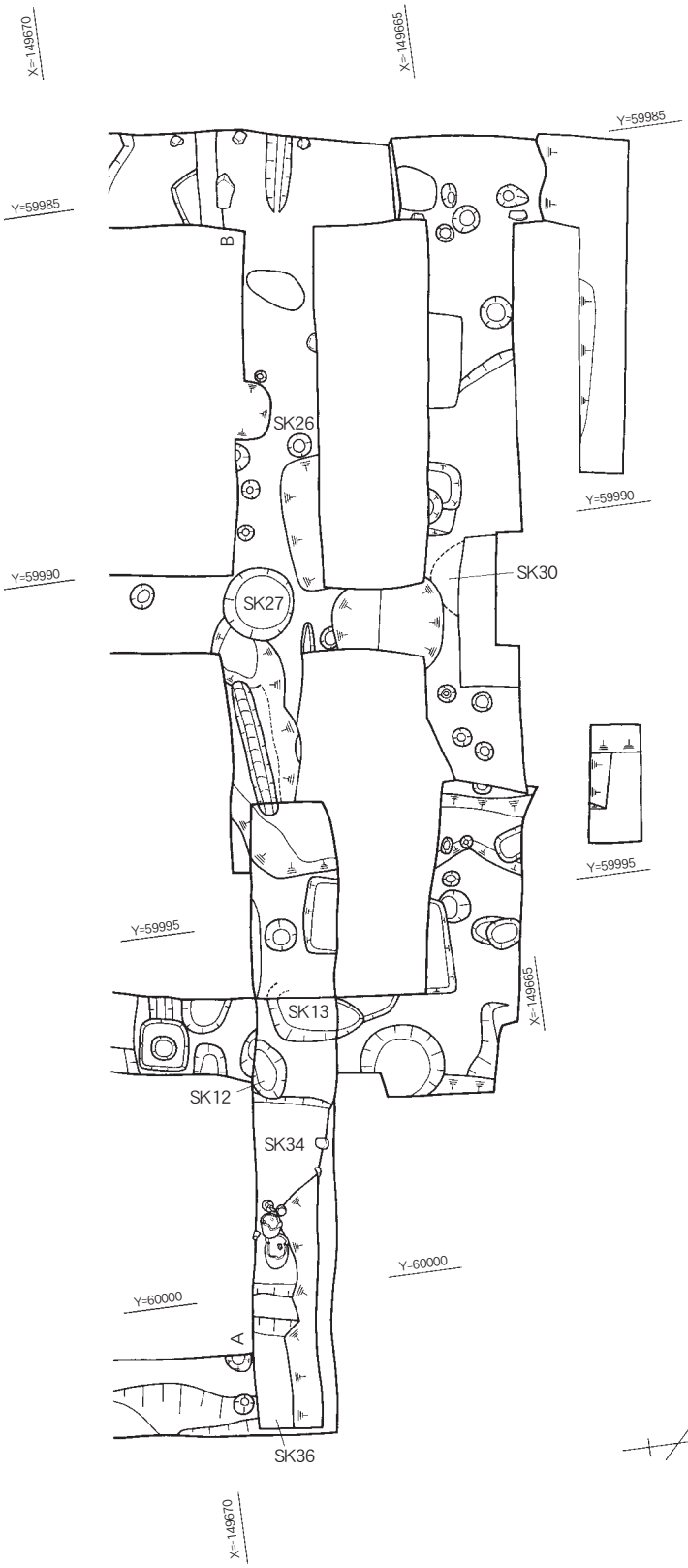
図　　版

図版 1
第 1 面平面図

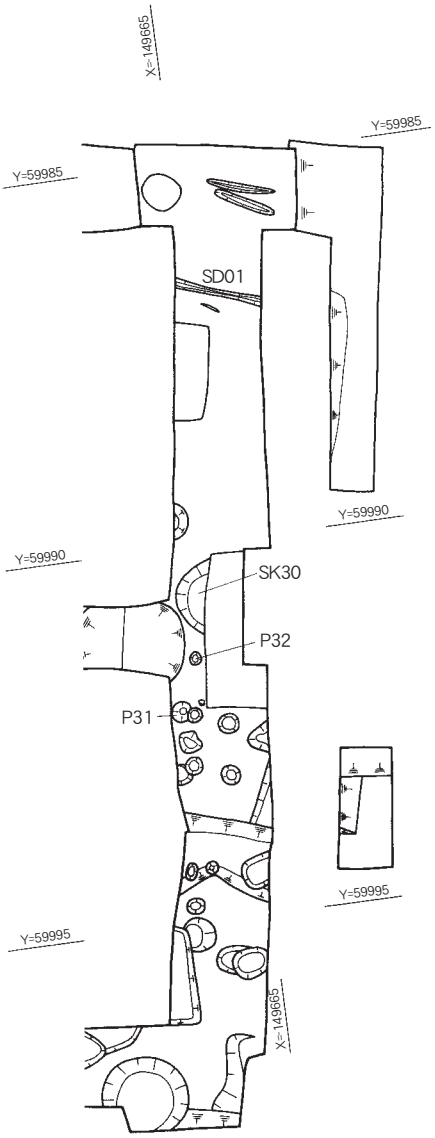

X=-149670
X=-149665
SK19
SK17
Y=59985
SK20
B
SK28
Y=59985
SK21
SA01
SE01
SK23
SK24
Y=59990
Y=59990
SK22
X=-149675
P08
Y=59995
SK03
Y=59995
SK13
X=-149665
SK33
SK09
SK01
Y=60000
Y=60000
A
SK35
SK37
X=-149675
X=-149670
0
5m

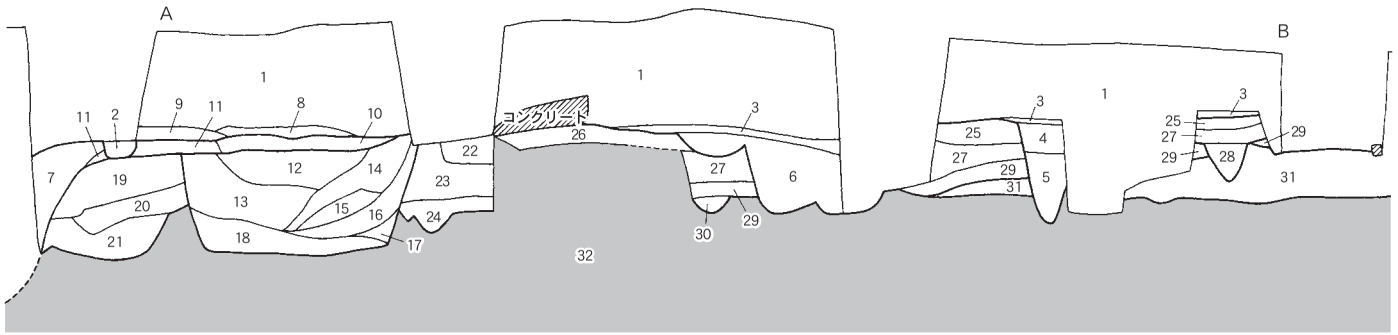
図版２
第２・３面平面図

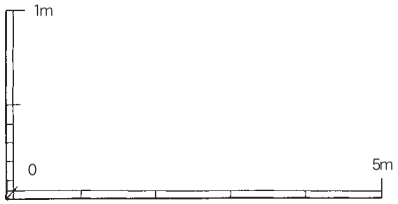
第２面



第３面





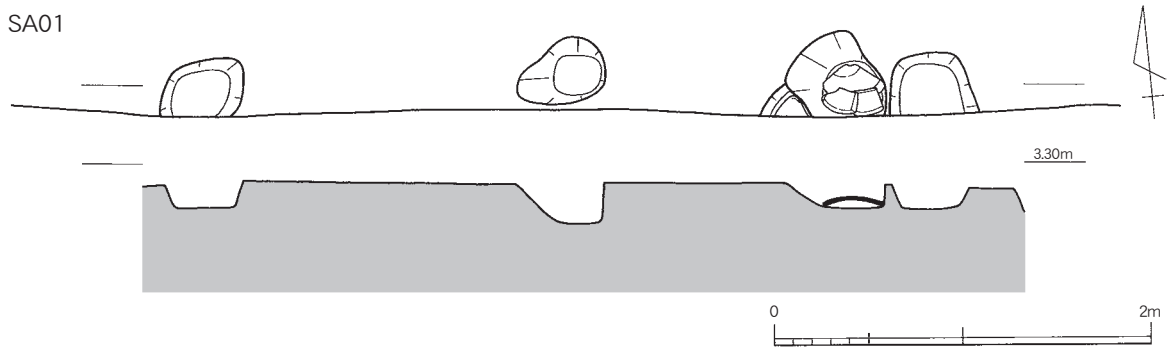


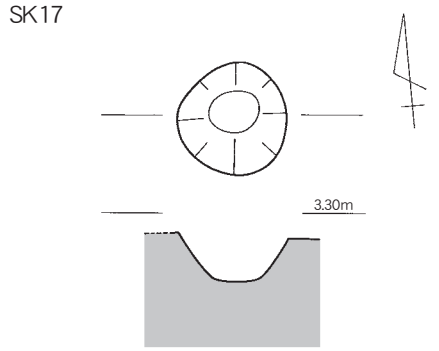
1 盛土
2 撹乱
3 2.5Y3/2 黒褐　細砂～極細砂：近代表土
4 2.5Y4/3 オリーブ褐　細砂～極細砂（漆喰・小礫を含む）
5 小・中礫
6 2.5Y4/1 黄灰　極細砂：撹乱
7 2.5Y3/2 黒褐シルト質極細砂：SK37
8 5Y4/2 灰オリーブ　シルト質極細砂～極細砂
9 2.5Y3/2 黒褐　極細砂～細砂：近代表土
10 2.5Y4/2 暗灰黄　細砂（粗砂・炭を含む）
11 2.5Y4/3 オリーブ褐　細砂～極細砂（粗砂を含む）
12 2.5Y4/3 オリーブ褐　細砂～極細砂（粗砂・炭を含む）：SK34
13 2.5Y4/2 暗灰黄　細砂（粗砂～小礫・炭を含む）：SK34
14 2.5Y4/2 暗灰黄　細砂（小・中礫を多く含む）：SK34
15 2.5Y4/2 暗灰黄　細砂（粗砂～小礫・炭を含む）：SK34
16 2.5Y3/2 黒褐　細砂～極細砂（粗砂を含む、炭を多く含む）：SK34
17 2.5Y5/3 黄褐　細砂～中礫：SK34
18 2.5Y4/1 黄灰　細砂（粗砂・炭を含む）：SK34
19 2.5Y4/3 オリーブ褐　極細砂（粗砂～小礫を含む）
20 2.5Y3/2 黒褐　極細砂～細砂（粗砂～小礫を多く含む）
21 2.5Y4/1 黄灰　細砂～中礫：SK36
22 2.5Y4/4 オリーブ褐　細砂～極細砂（粗砂～小礫を含む）
23 2.5Y4/3 オリーブ褐　細砂～極細砂（粗砂～小礫を含む）
24 2.5Y3/2 黒褐　極細砂～細砂（粗砂～小礫を含む）
25 2.5Y4/3 オリーブ褐　細砂（粗砂を含む）
26 2.5Y4/3 オリーブ褐　極細砂～細砂（粗砂を含む）：整地層
27 2.5Y4/3 暗灰黄　細砂～中砂（粗砂・炭を含む）
28 10YR2/1 黒褐　極細砂～細砂（粗砂・炭を含む）
29 2.5Y4/3 オリーブ褐　粗砂～小礫：洪水砂
30 2.5Y4/1 黄灰　極細砂（粗砂を含む）
31 5Y5/2 灰オリーブ　細砂（粗砂～小礫を含む）
32 5Y5/3 灰オリーブ　シルト質極細砂～極細砂

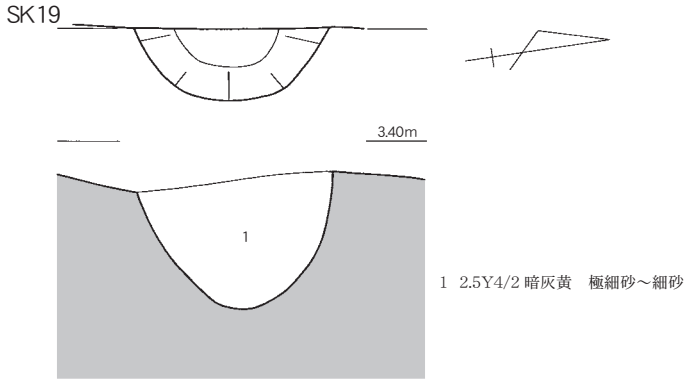
図版 3
土層断面図

図版４
西部の遺構（１）

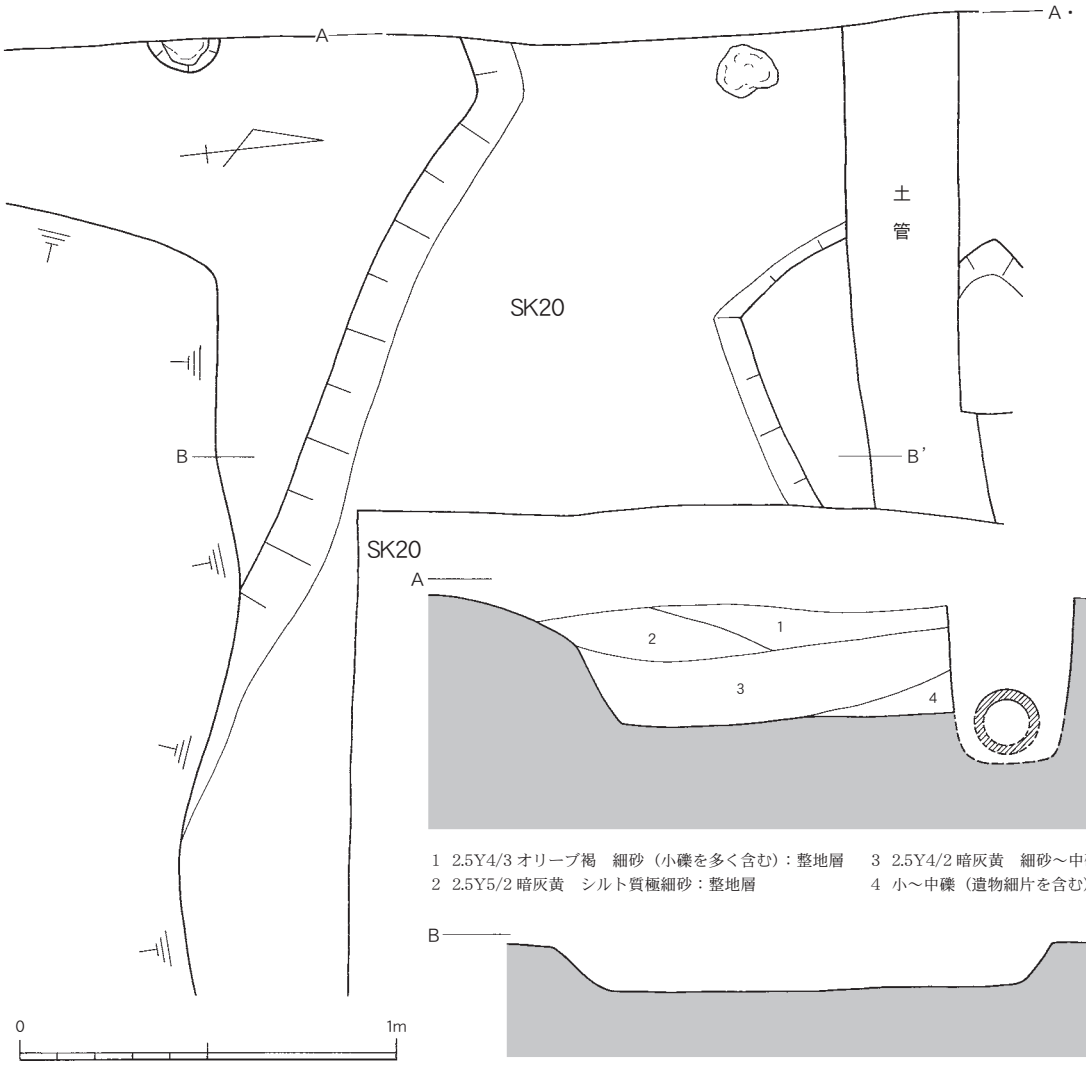
礎石群

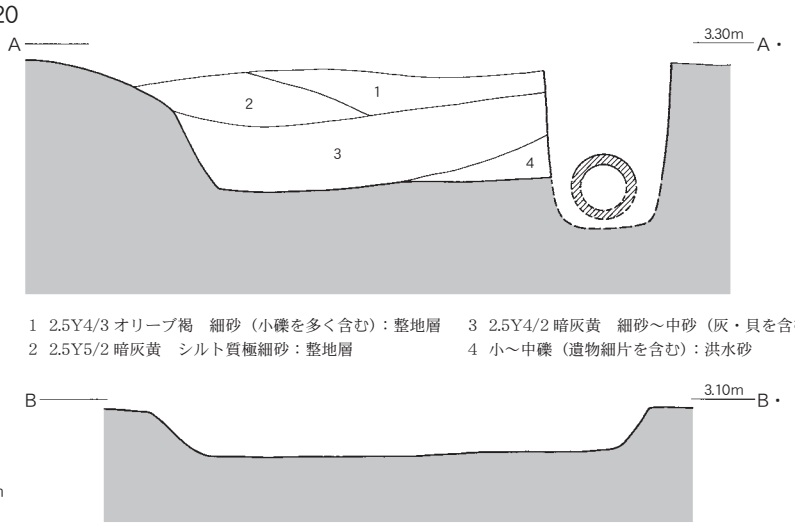






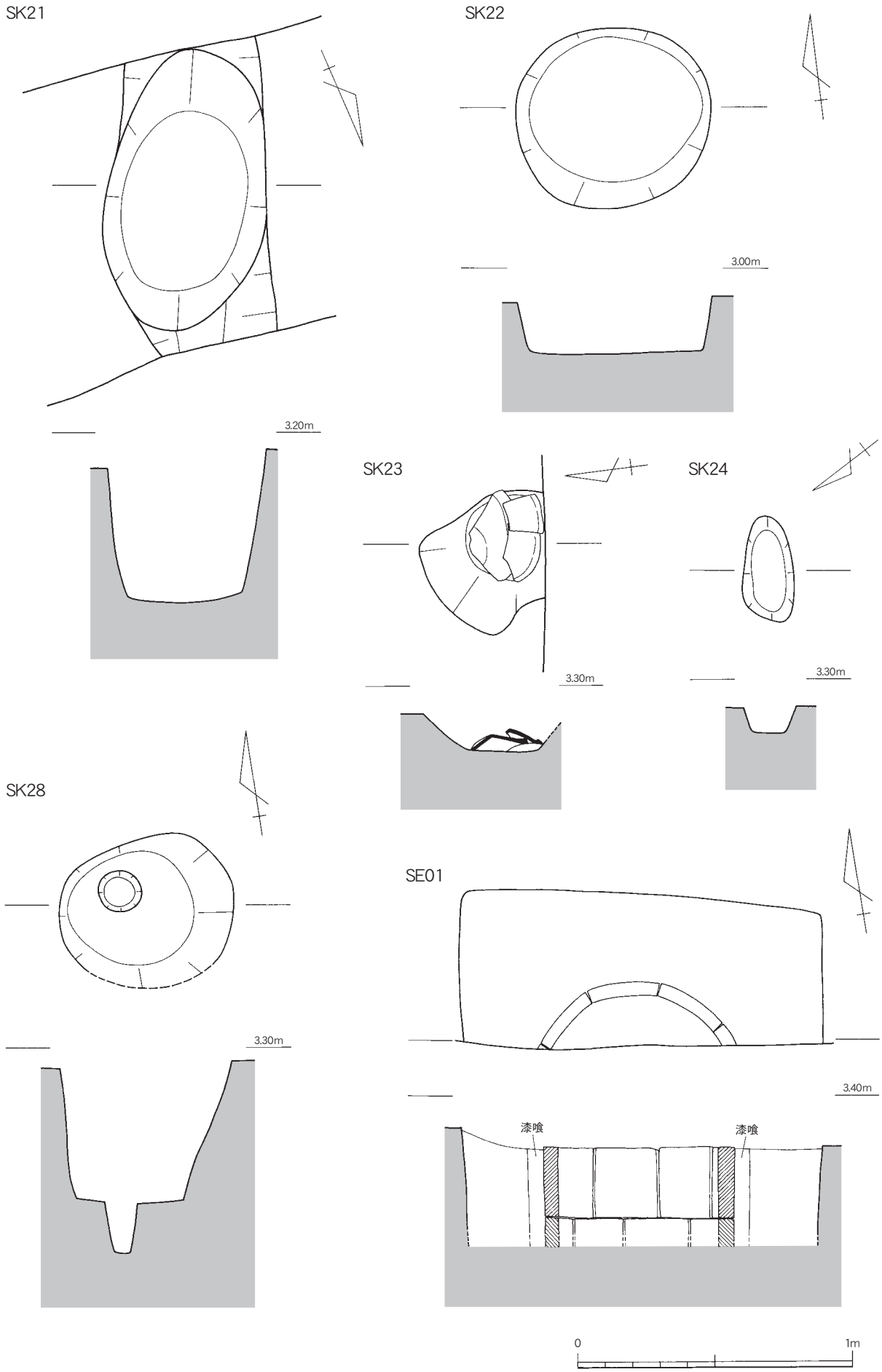
1 2.5Y4/2 暗灰黄　極細砂～細砂



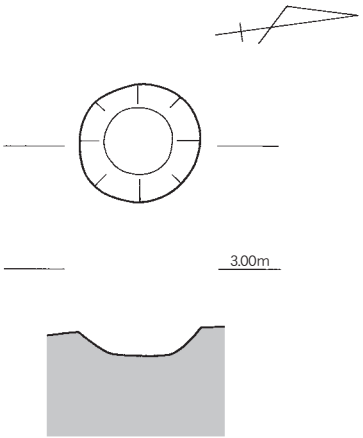


1 2.5Y4/3 オリーブ褐　細砂（小礫を多く含む）：整地層
2 2.5Y5/2 暗灰黄　シルト質極細砂：整地層
3 2.5Y4/2 暗灰黄　細砂～中砂（灰・貝を含む）
4 小～中礫（遺物細片を含む）：洪水砂

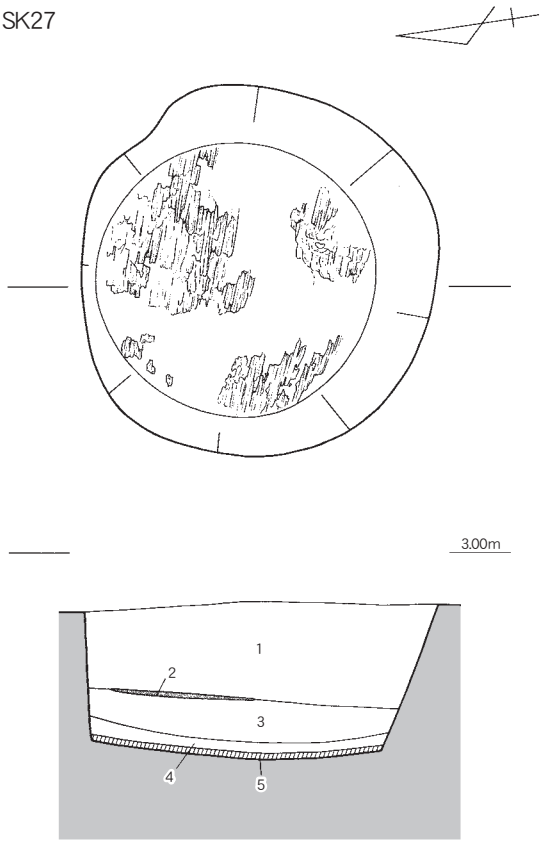
図版６
西部の遺構（３）


SK21
3.20m
SK22
3.00m
SK23
3.30m
SK24
3.30m
SK28
3.30m
SE01
3.40m
漆喰
漆喰
0
1m

SK26

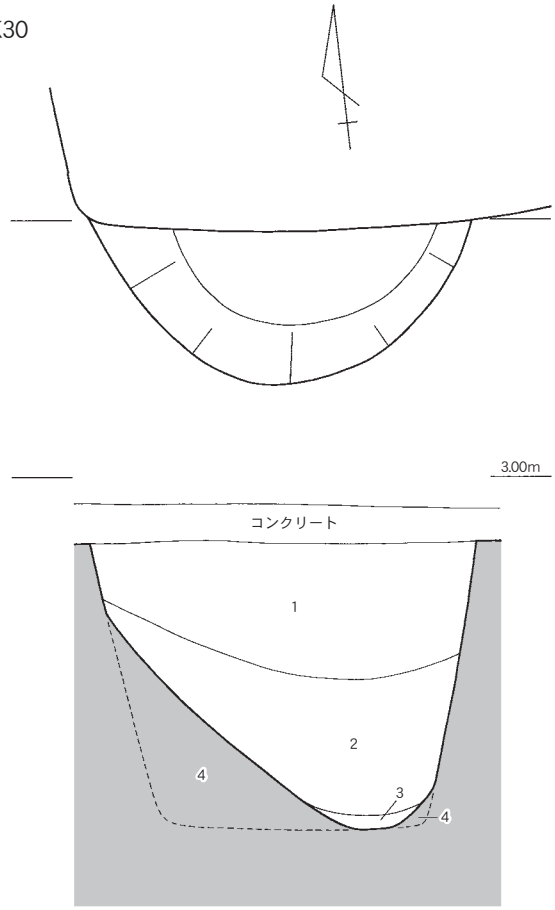


SK27



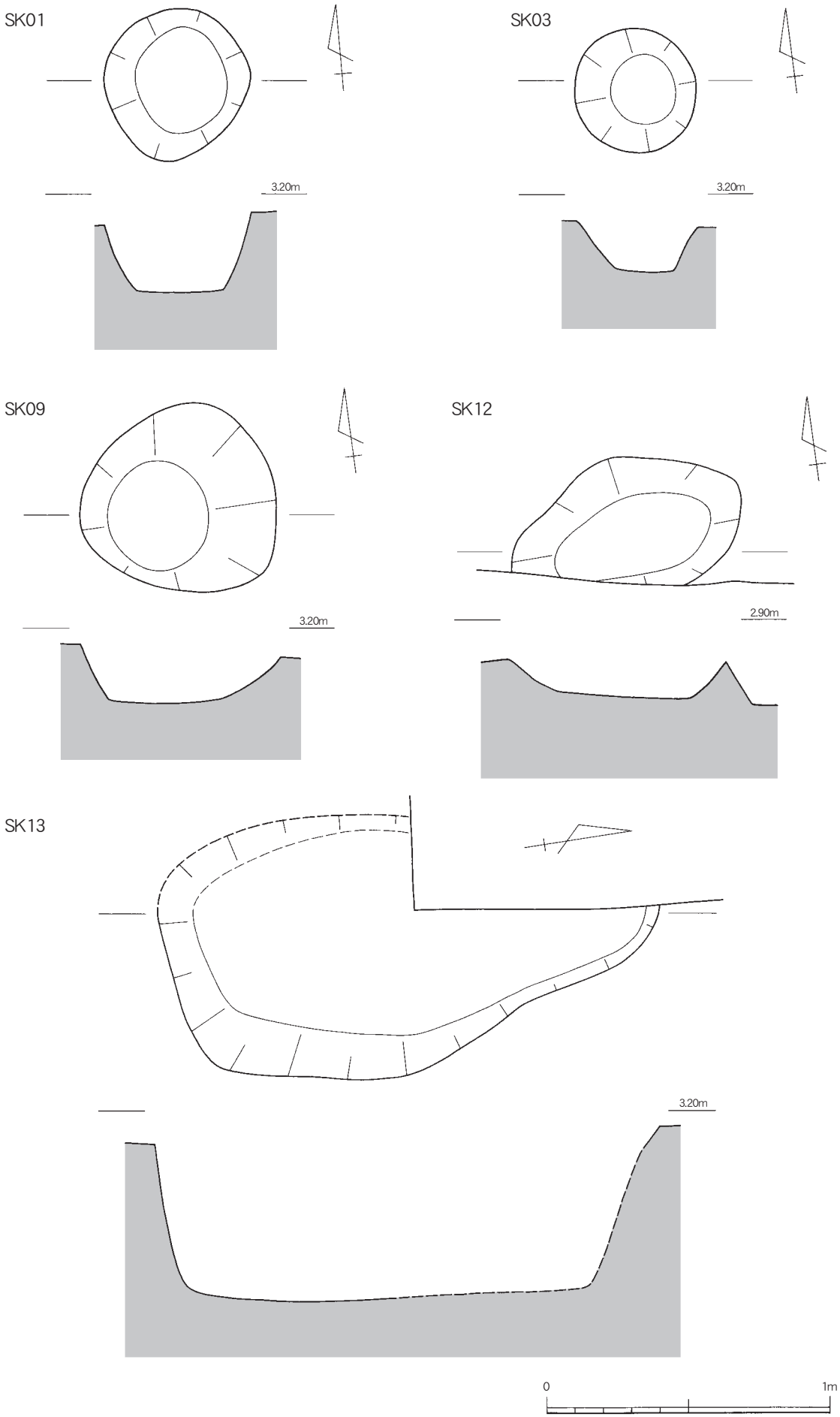
1 2.5Y4/3 オリーブ褐　極細砂～細砂（漆喰を多く含む）
2 炭
3 2.5Y4/4 オリーブ褐　極細砂～細砂
4 2.5Y4/1 黄灰　シルト質極細砂
5 板

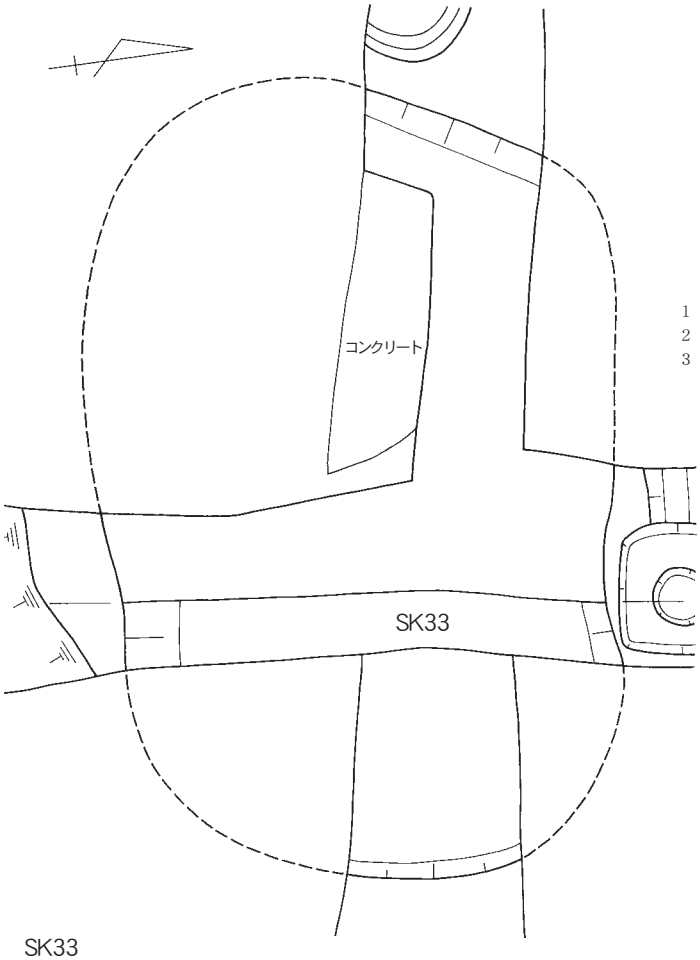
SK30



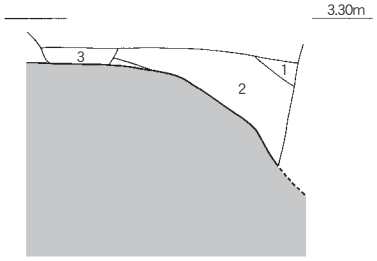
1 2.5Y4/2 暗灰黄　極細砂～細砂
2 2.5Y4/3 オリーブ褐　極細砂～シルト質極細砂
3 2.5Y3/2 黒褐　シルト質極細砂

図版８
東部の遺構（１）

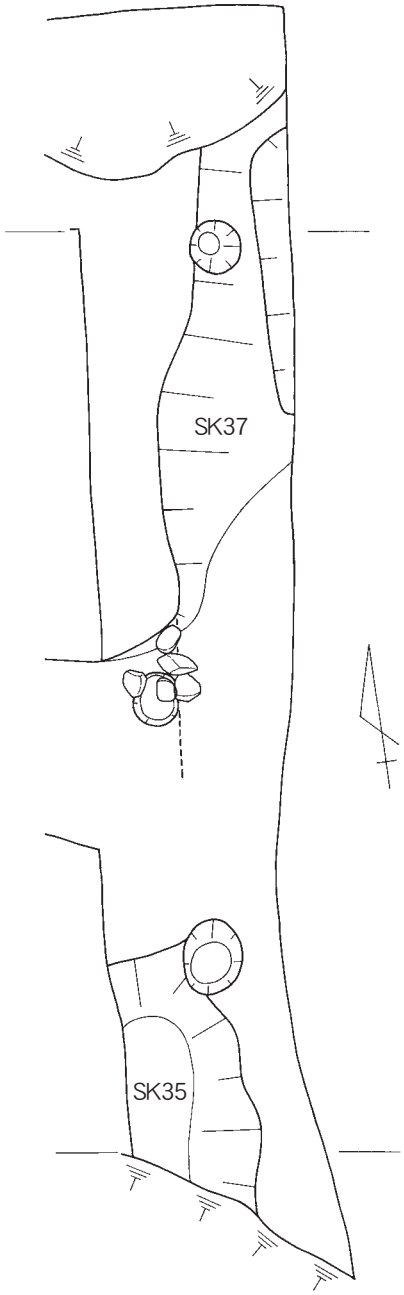




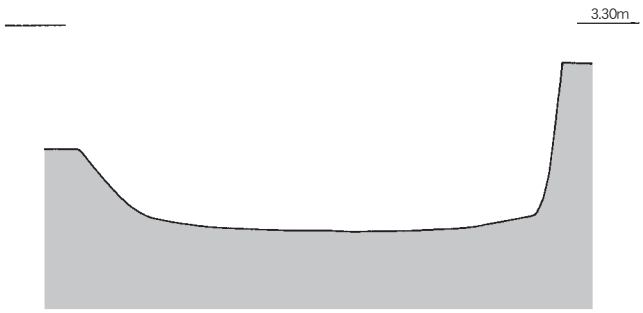
SK37



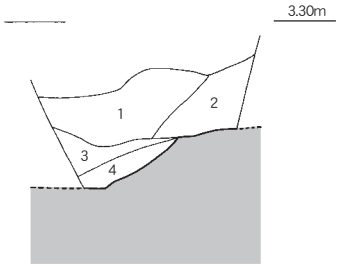
1　5Y4/3 暗オリーブ　極細砂～シルト質極細砂（瓦・陶磁器を多く含む）
2　2.5Y3/2 黒褐　シルト質極細砂（陶磁器を多く含む）
3　撹乱



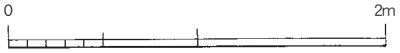
SK33



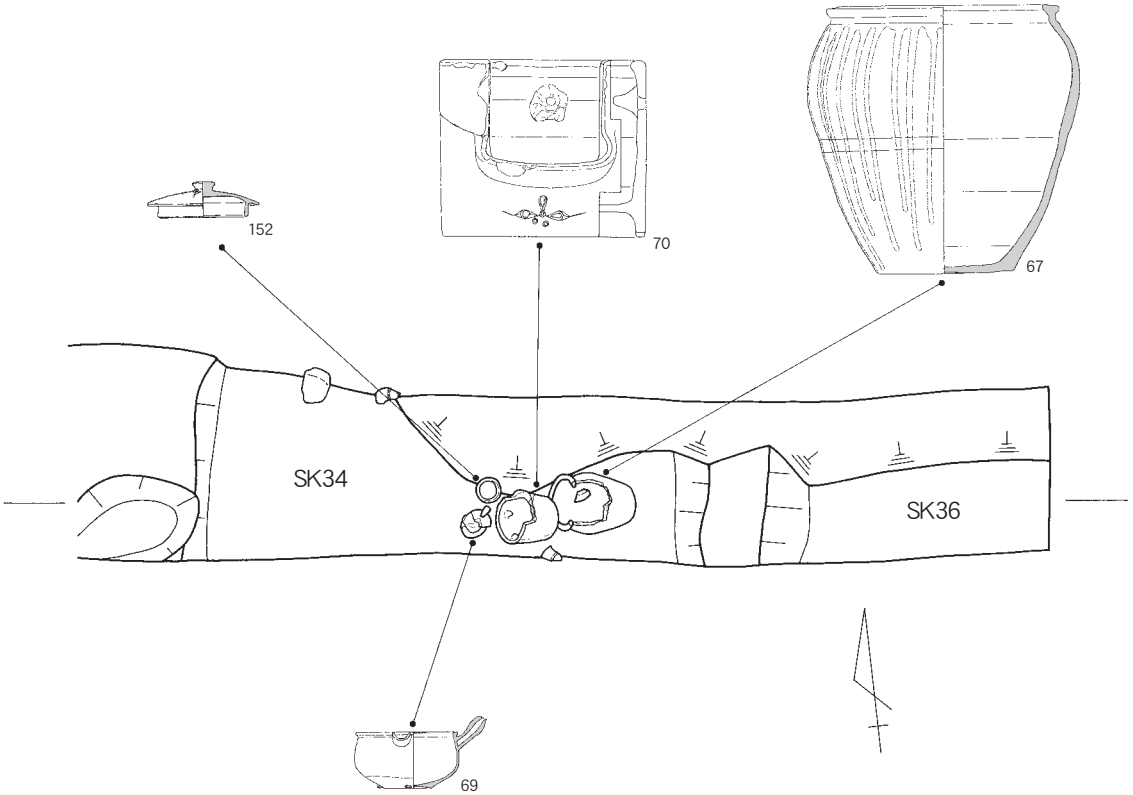
SK35

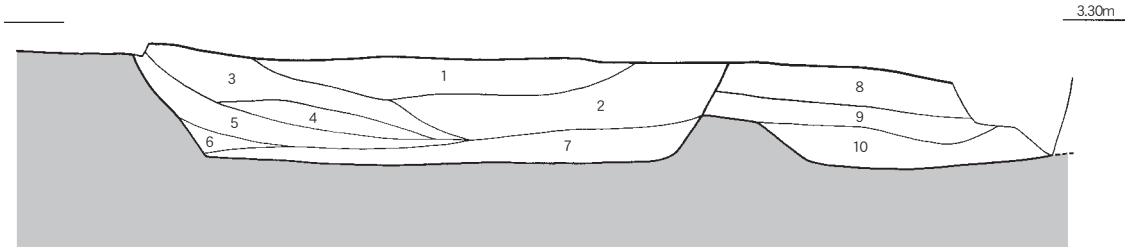


1　2.5Y3/1 黒褐　極細砂（粗砂～小礫を含む、遺物を多く含む）
2　2.5Y3/2 黒褐　極細砂～細砂（炭を含む）
3　5Y4/4 暗オリーブ　極細砂（粗砂を多く含む）：整地土
4　5Y3/1 オリーブ黒　シルト質極細砂（粗砂を多く含む）

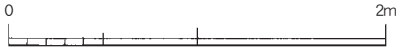


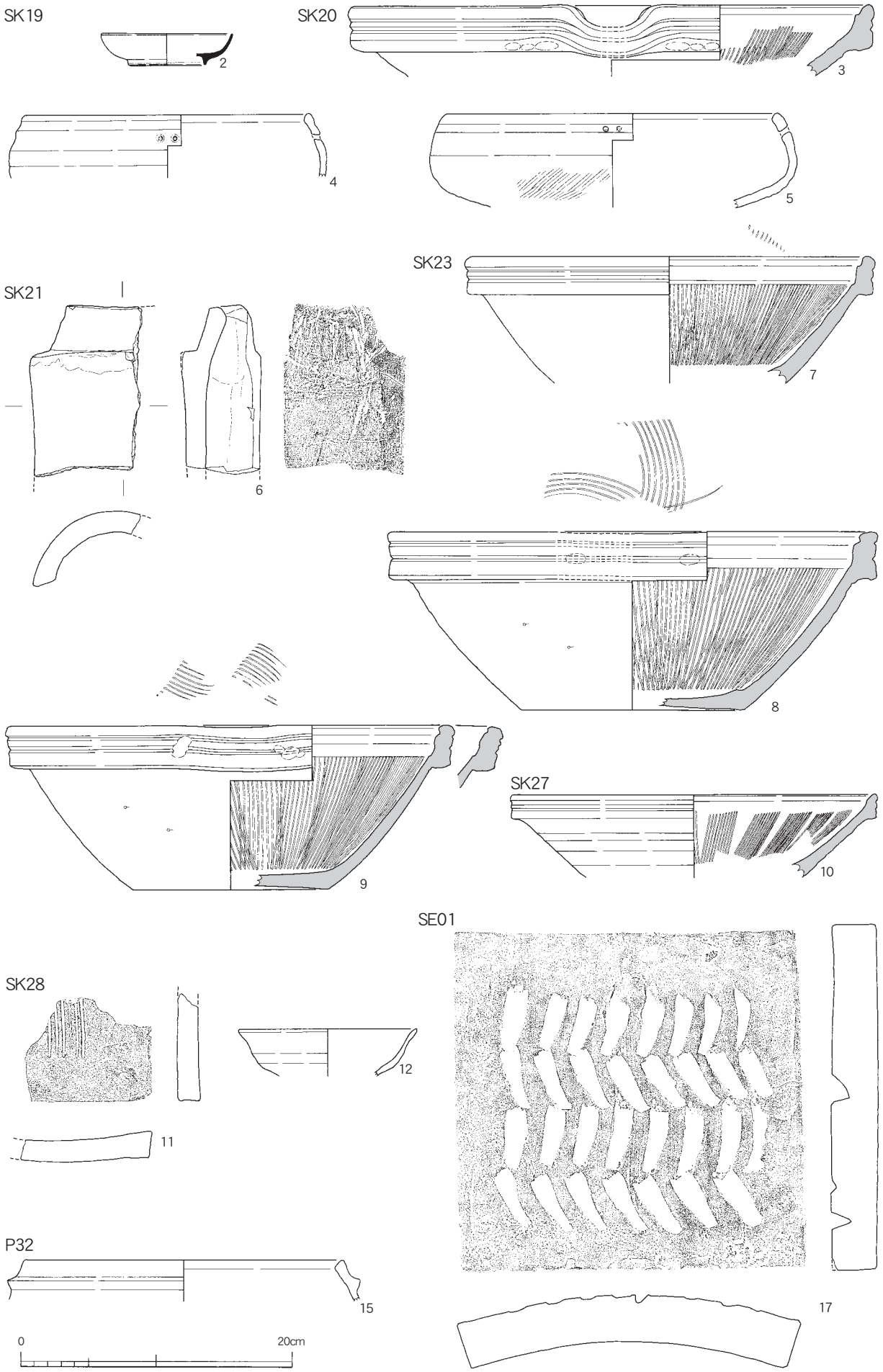
図版 10
東部の遺構（3）



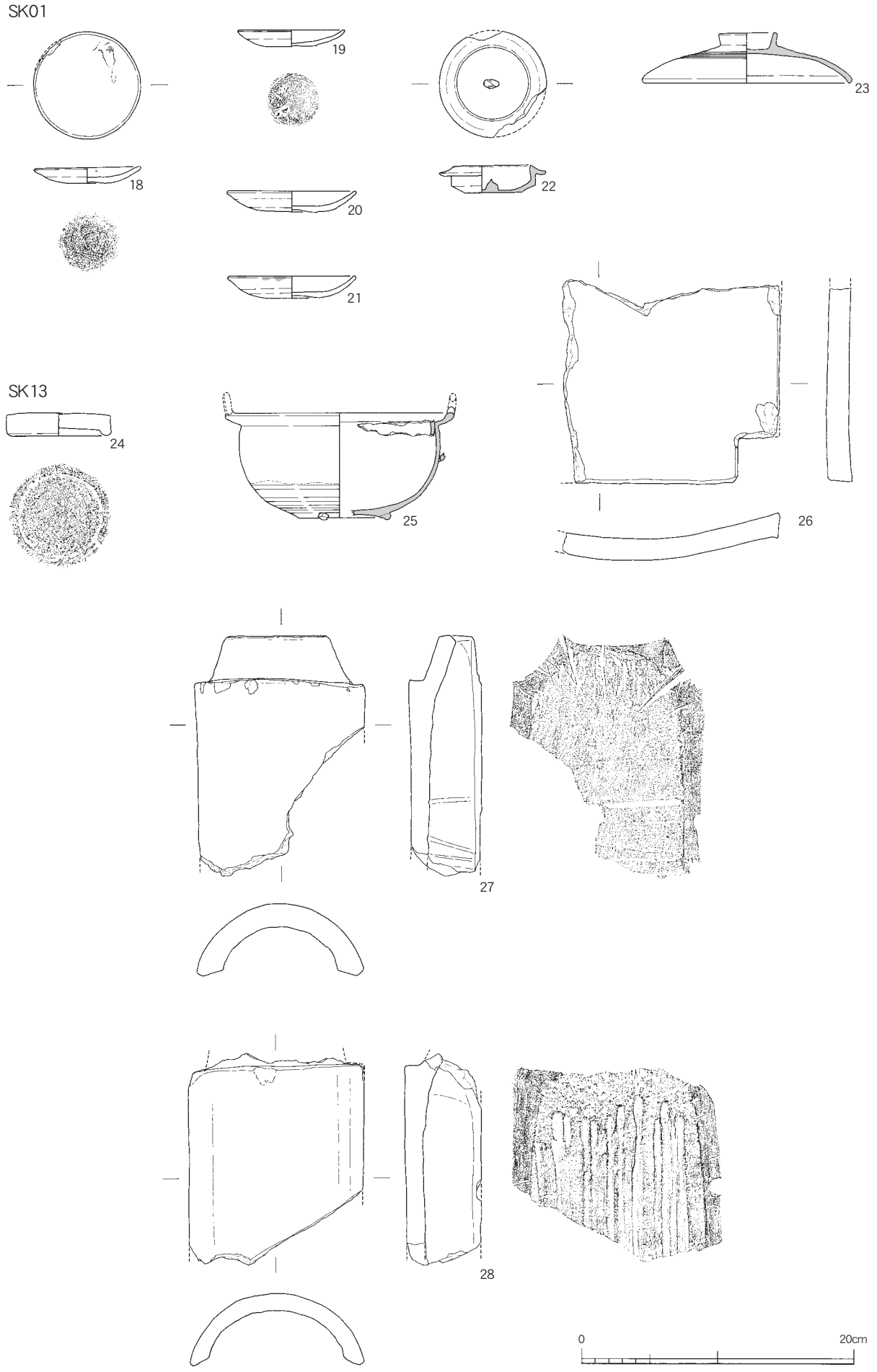


1 2.5Y4/3 オリーブ褐　細砂～極細砂（粗砂・炭を含む）：SK34
2 2.5Y4/2 暗灰黄　細砂（粗砂～小礫・炭を含む）：SK34
3 2.5Y4/2 暗灰黄　細砂（小・中礫を多く含む）：SK34
4 2.5Y4/2 暗灰黄　細砂（粗砂～小礫・炭を含む）：SK34
5 2.5Y3/2 黒褐　細砂～極細砂（粗砂を含む、炭を多く含む）：SK34
6 2.5Y5/3 黄褐　細砂～中礫：SK34
7 2.5Y4/1 黄灰　細砂（粗砂・炭を含む）：SK34
8 2.5Y4/3 オリーブ褐　極細砂（粗砂～小礫を含む）
9 2.5Y3/2 黒褐　極細砂～細砂（粗砂～小礫を多く含む）
10 2.5Y4/1 黄灰　細砂～中礫：SK36

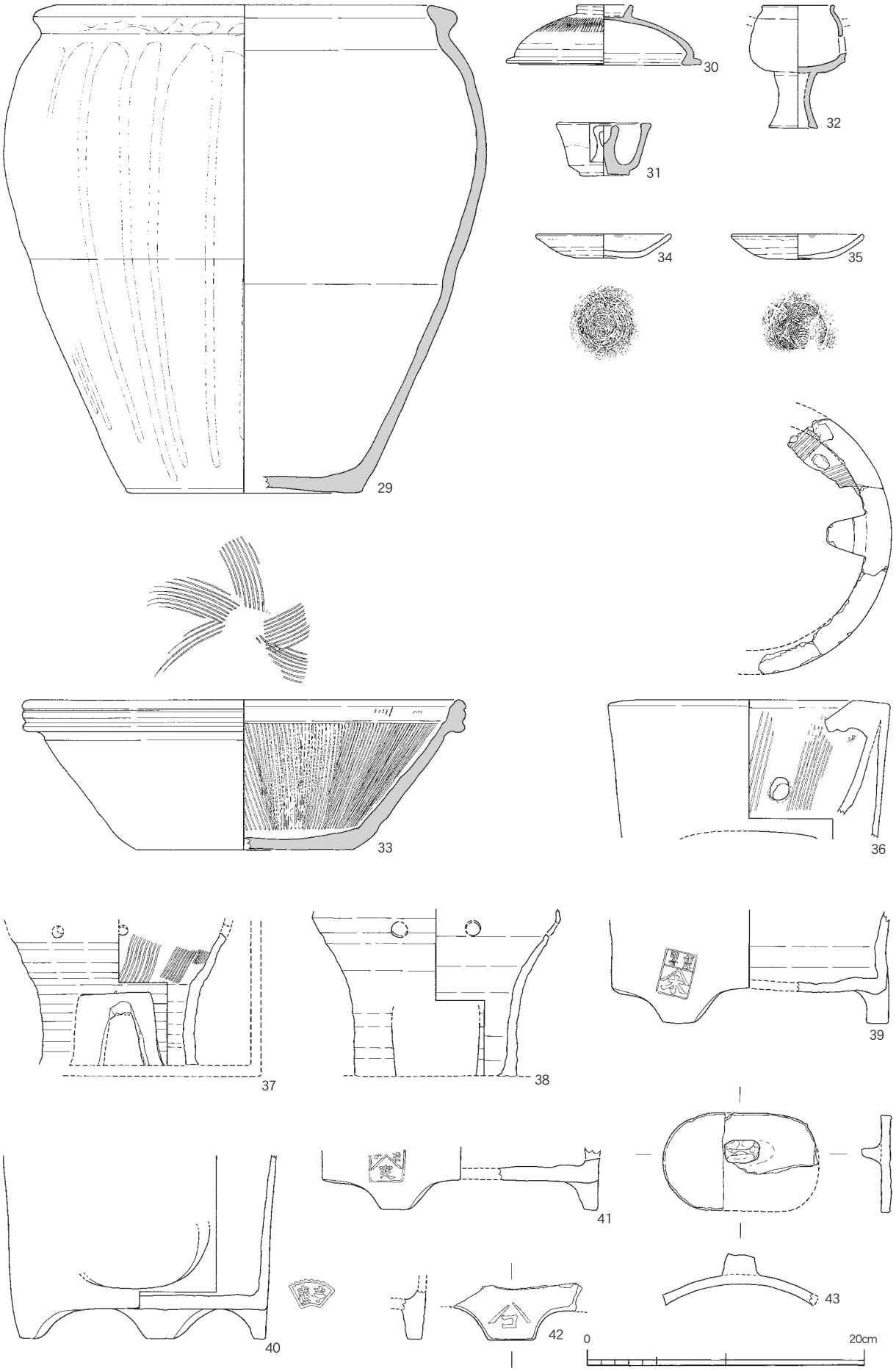



SK19
2
SK20
3
4
5
SK23
7
SK21
6
8
9
SK27
10
SE01
SK28
12
11
P32
15
17
0
20cm

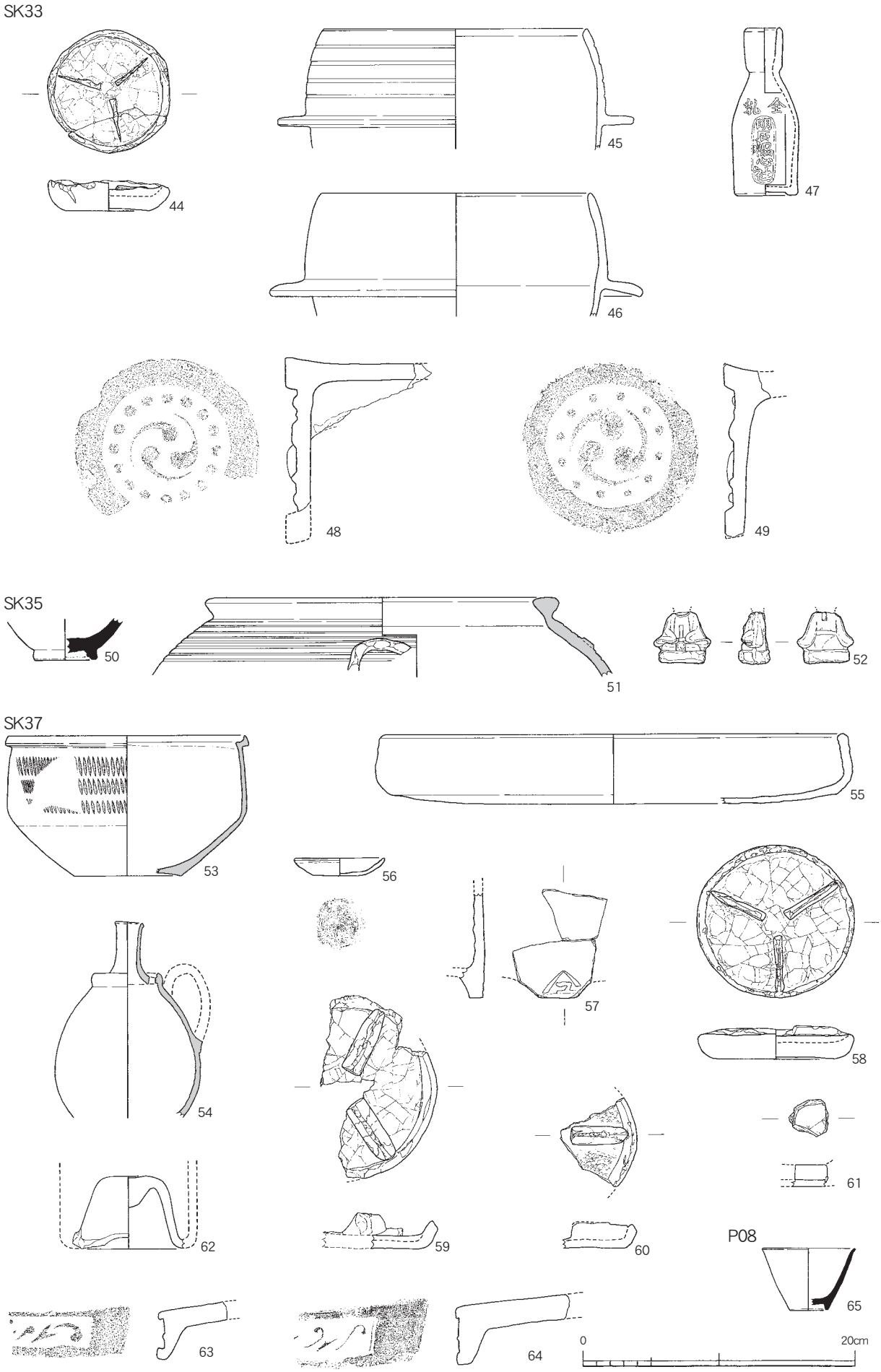
図版 12
土器・陶磁器（2）



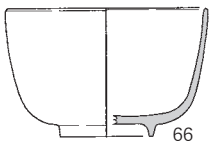
SK33

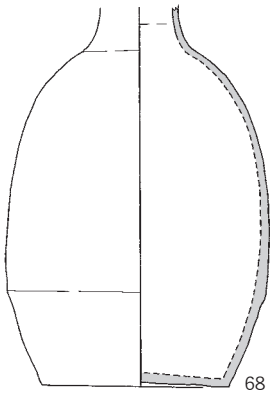


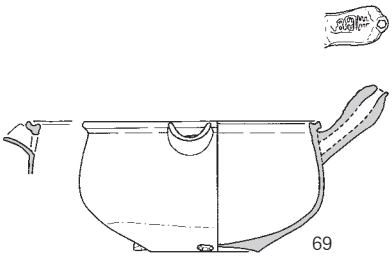
図版 14
土器・陶磁器（4）


SK33
44
45
46
47
48
49
SK35
50
51
52
SK37
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
P08
65
0
20cm

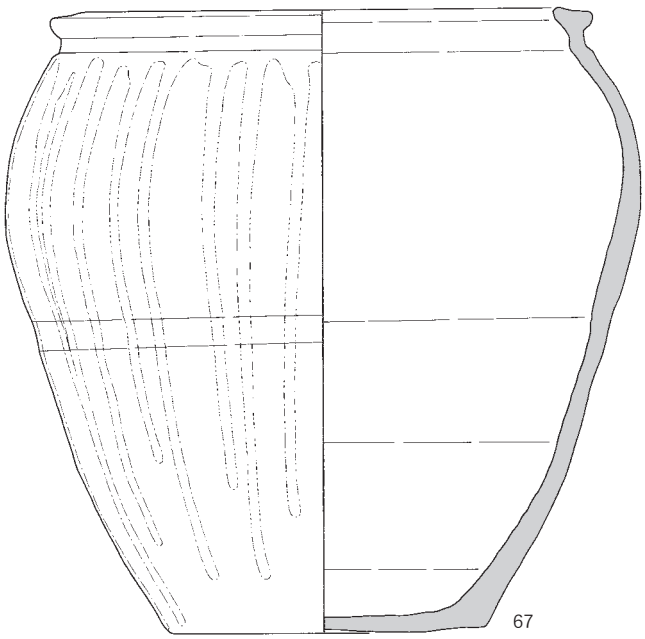
SK12

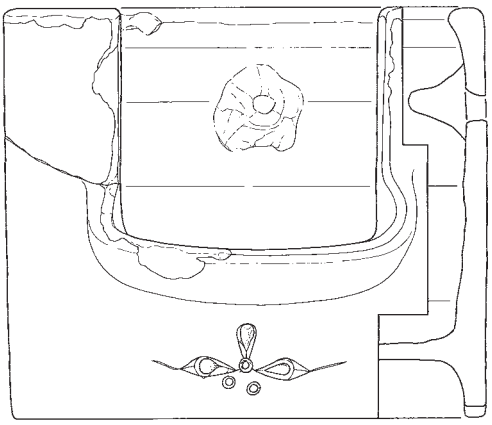


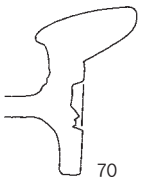




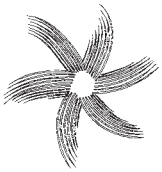
SK34

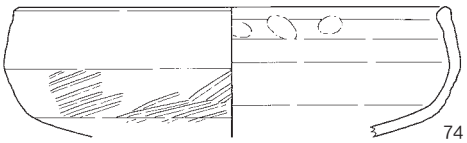


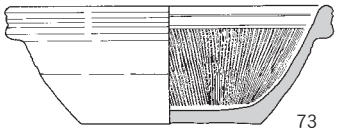


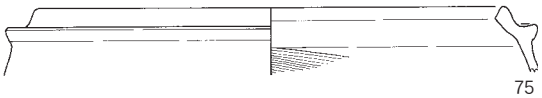


西部包含層



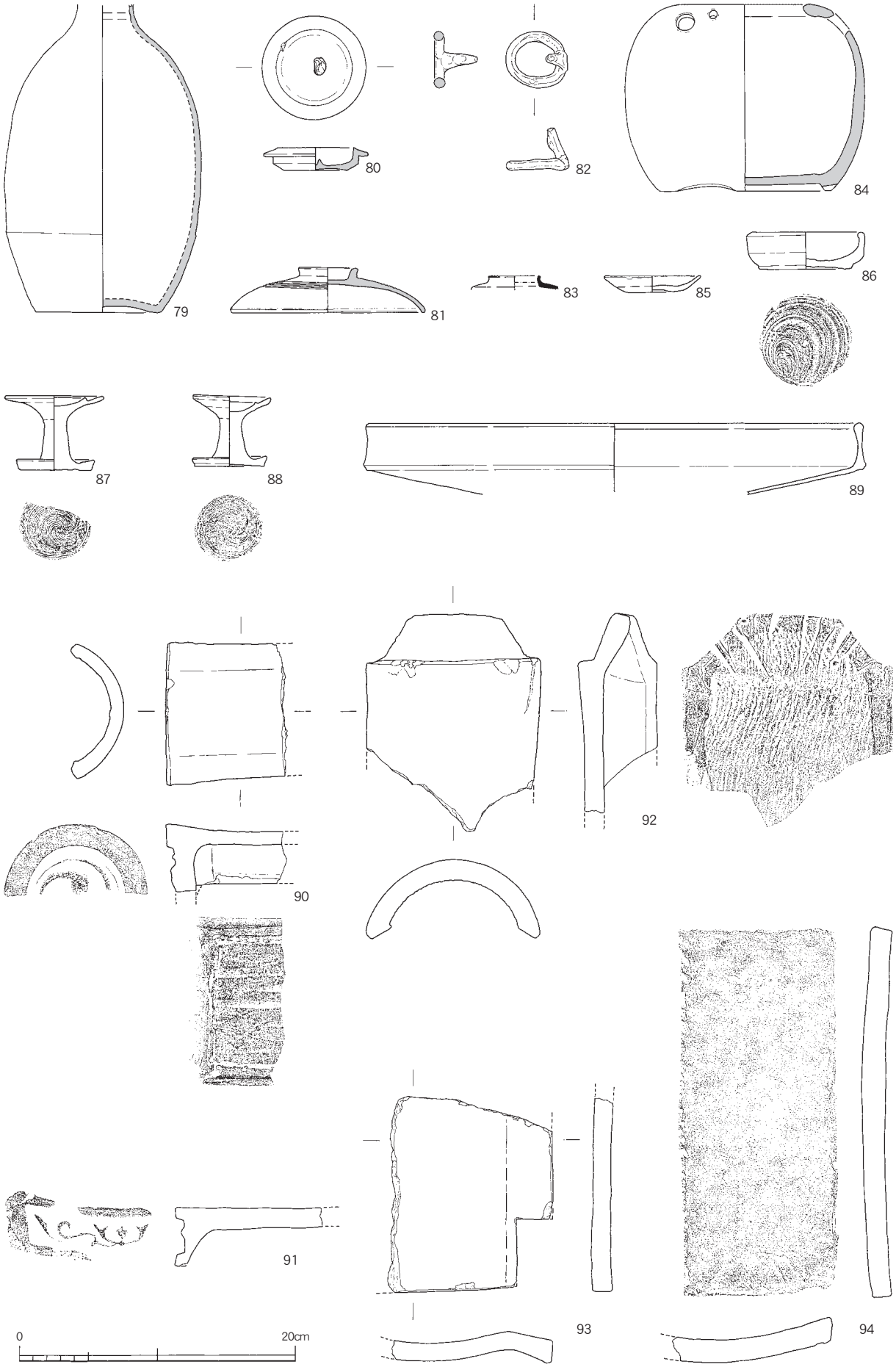




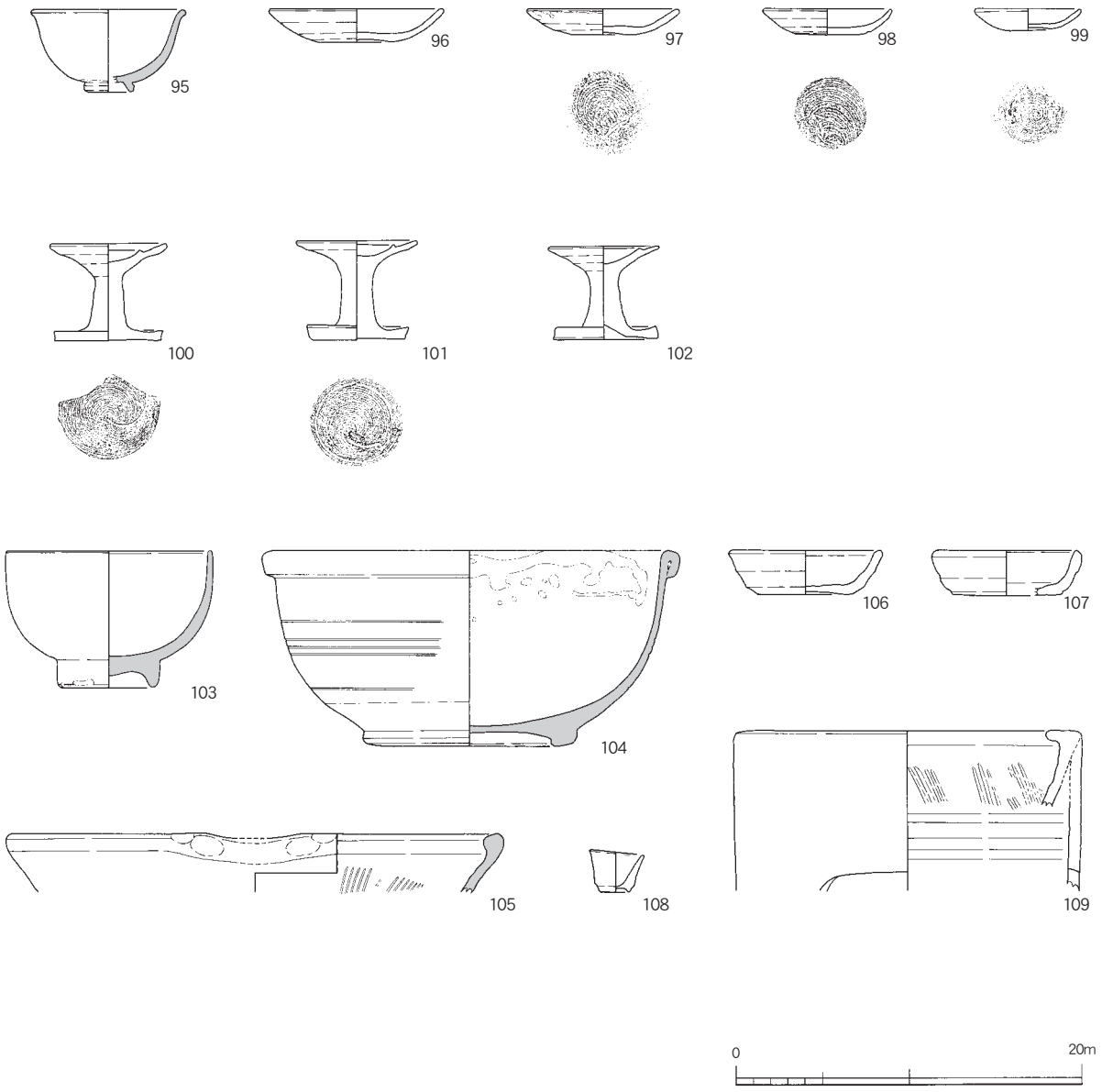


図版 16
土器・陶磁器（6）

東部包含層

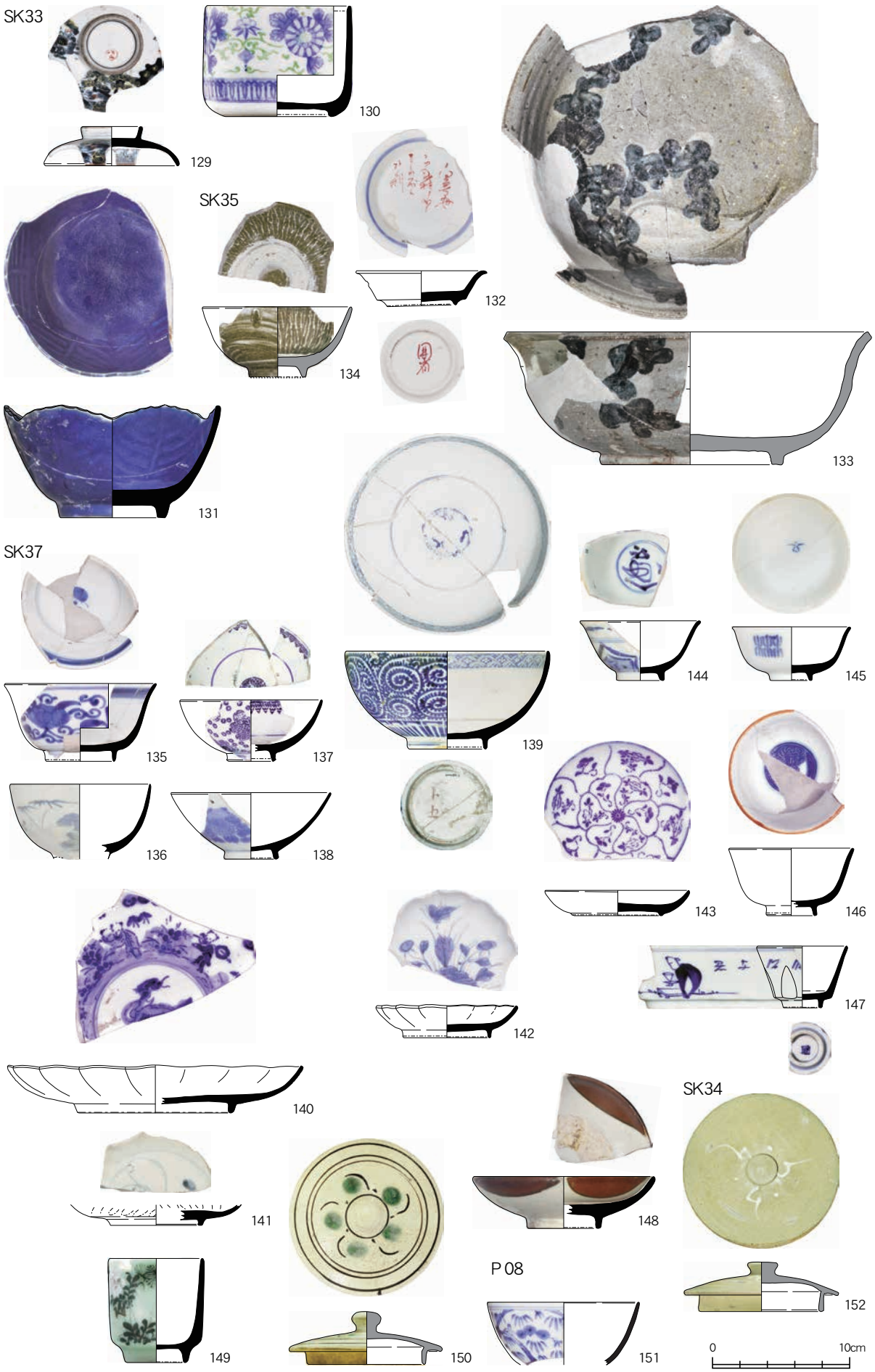


東部包含層



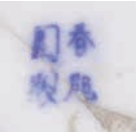
図版 18
土器・陶磁器（8）

SK20
SK01
SK09
SK33
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
0
10cm


SK33
130
129
SK35
132
134
133
131
SK37
144
145
135
137
139
136
138
143
146
147
142
140
SK34
141
148
P 08
149
150
151
152
0
10cm

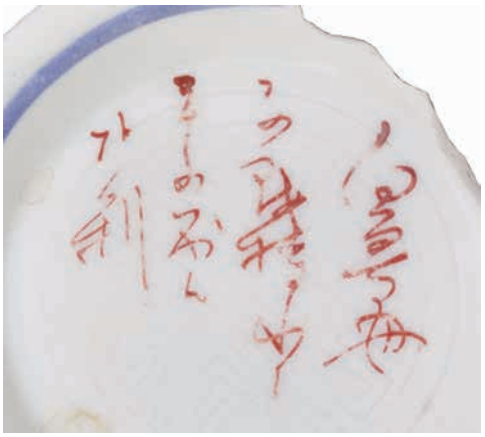
図版 20
土器・陶磁器（10）

包含層

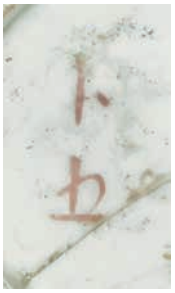

117

118

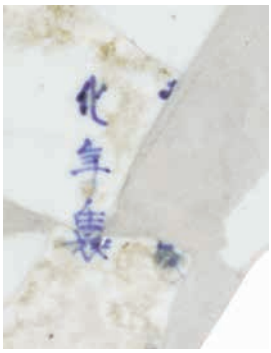
127



129


139

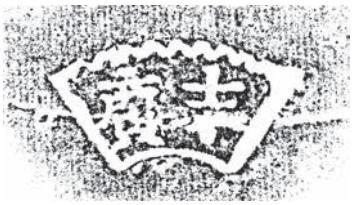
147


164

166

132

39


40

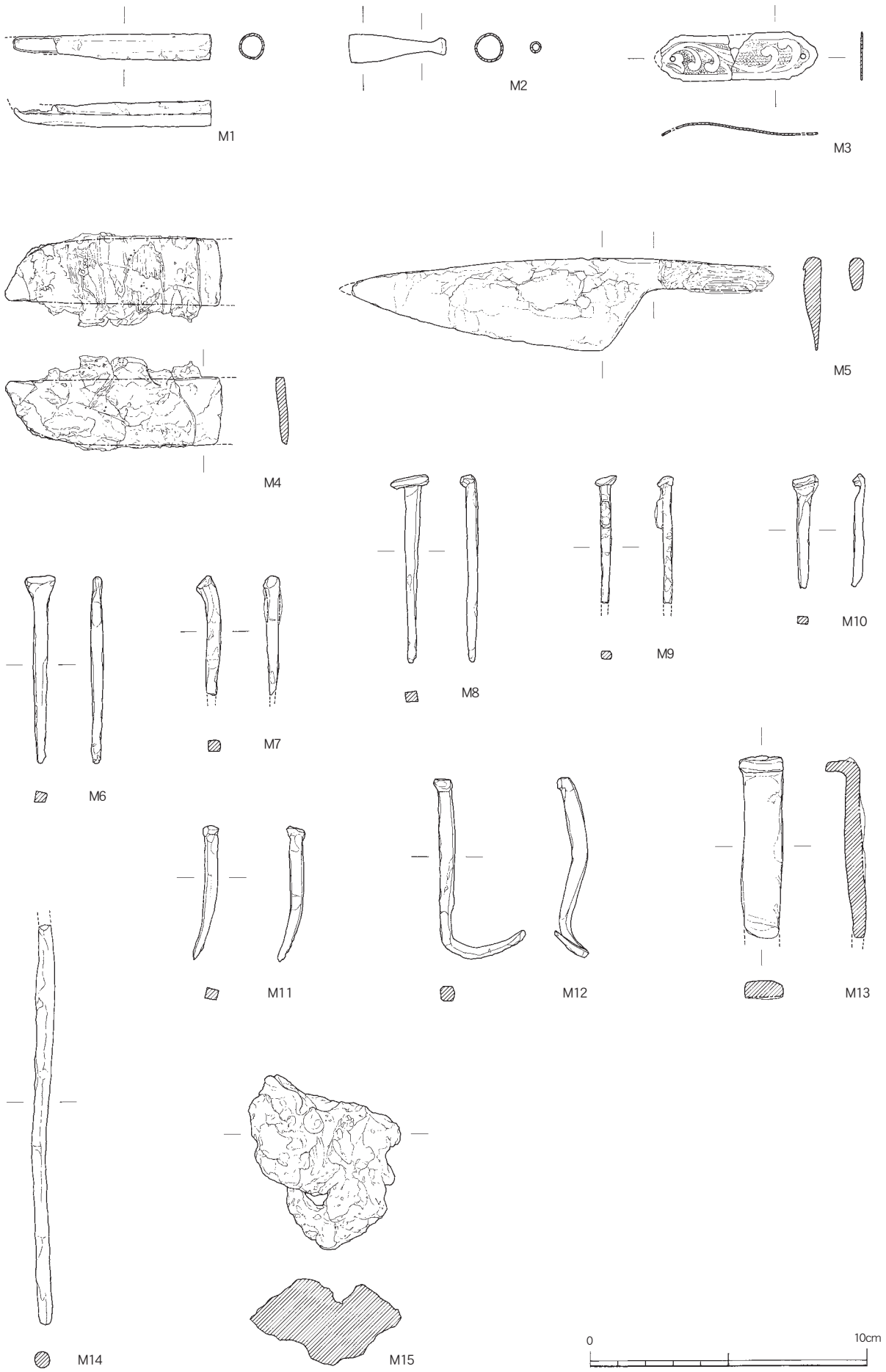
41

42

57

0 5cm

図版 22
金属製品



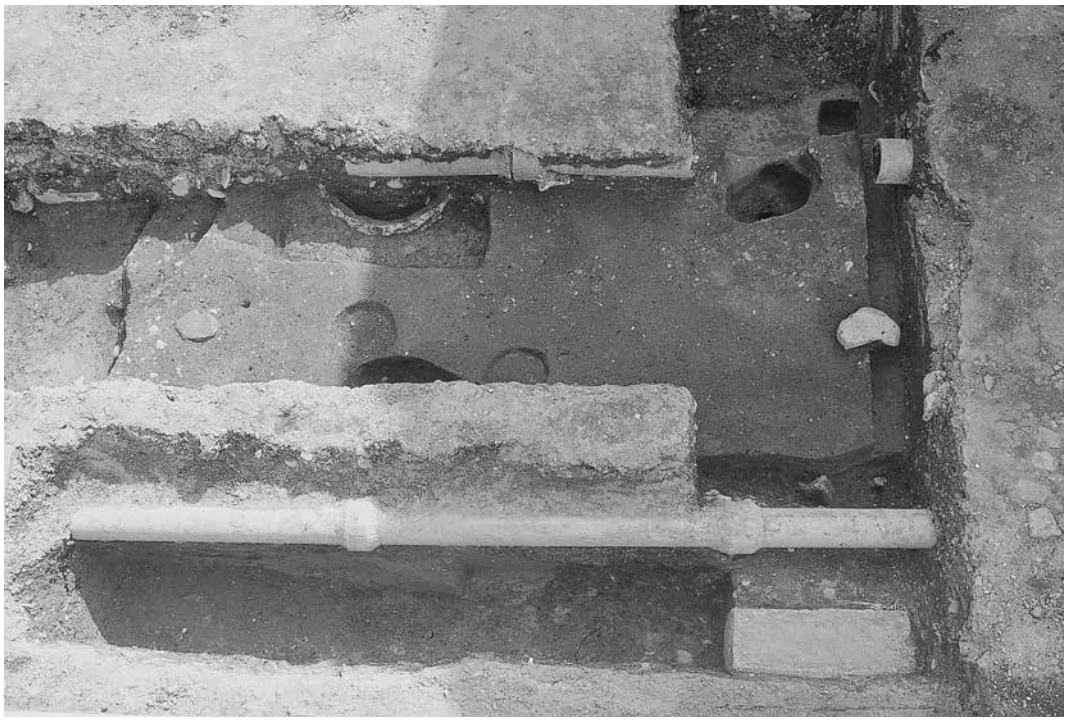
写真図版

西部２区１面全景
（北から）

西部２区１面全景
（東から）

西部２区２面全景
（北から）

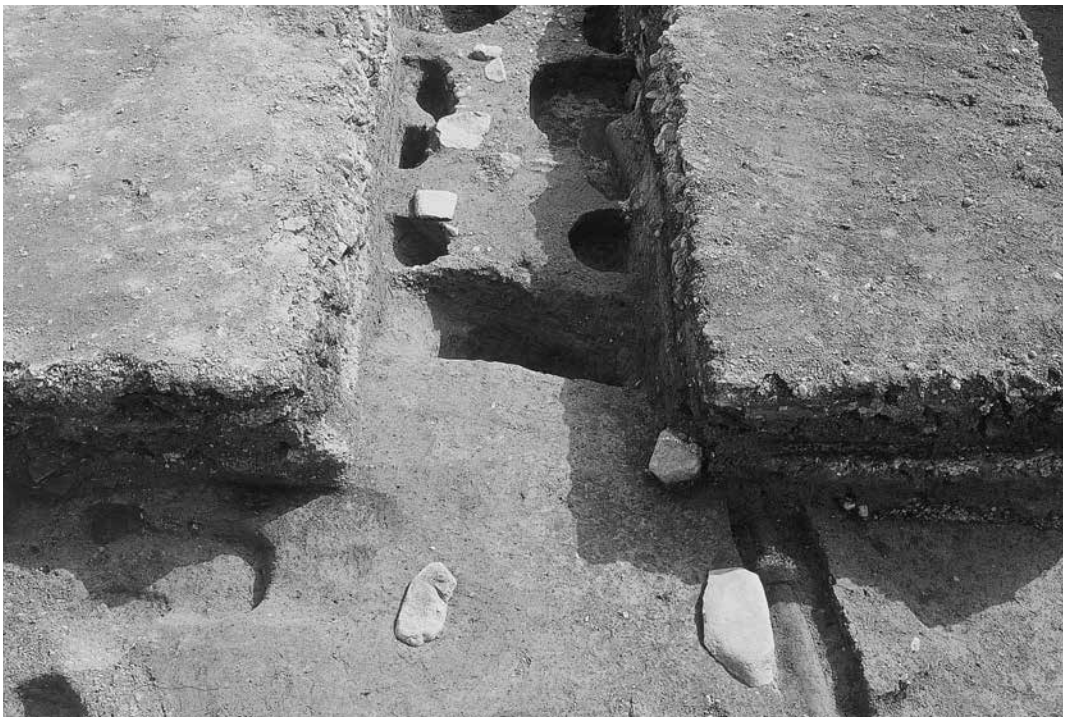
写真図版２



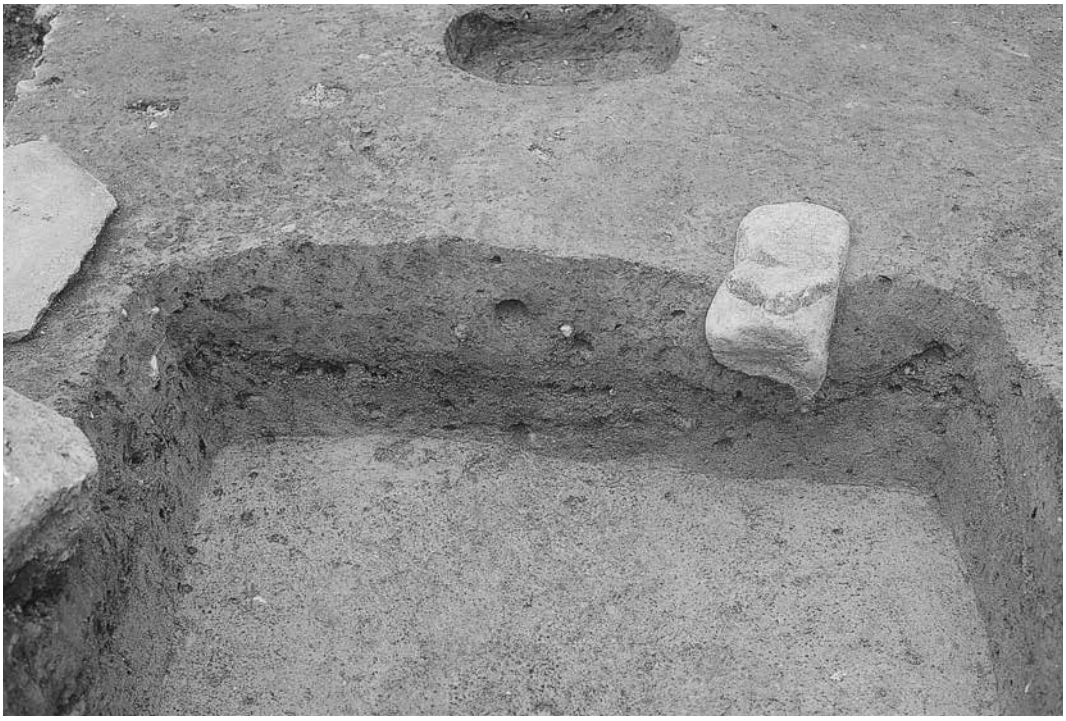
西部３区１面西部
（北から）

西部３区２面西部
（西から）

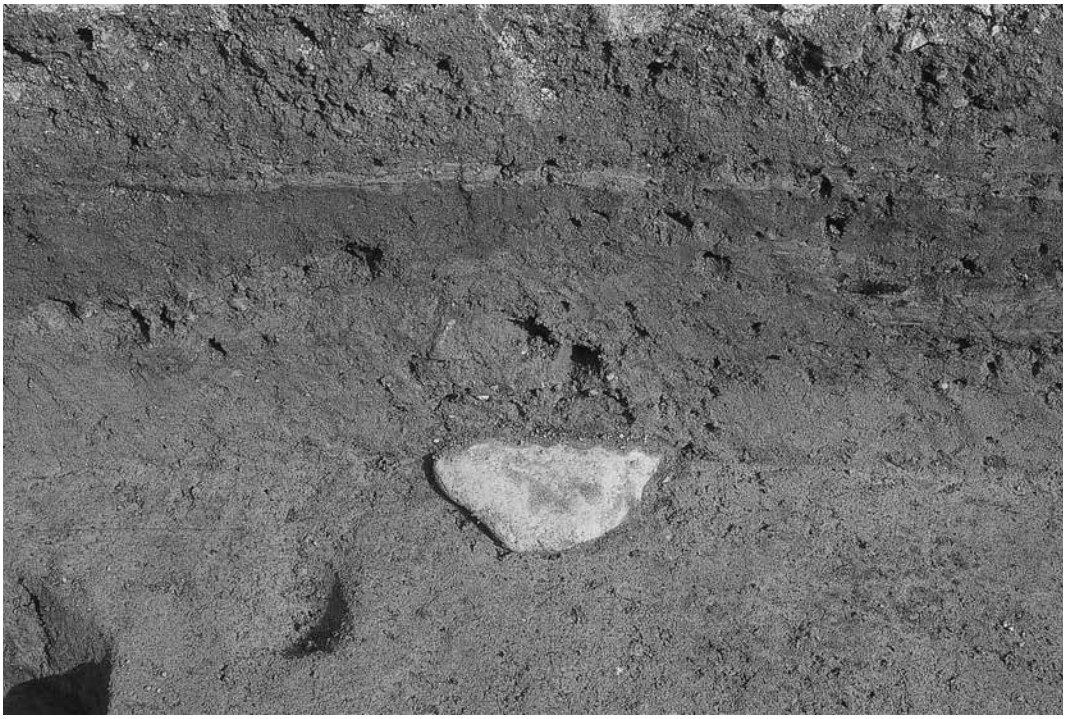
西部３区３面東部
（東から）



西部２－24・30 区礎石
（西から）



西部２－30 区礎石断面
（東から）



西部２－24 区礎石断面
（南から）

写真図版 4

西部 SK22
（北から）

西部 SK23
（北から）

西部 SK28
（南から）

西部 SE01
（北から）

西部 SK27
（北から）

西部ＳＫ 30
（南から）

写真図版６

東部１区１面全景
（南西から）

東部１区１面北西部
（東から）

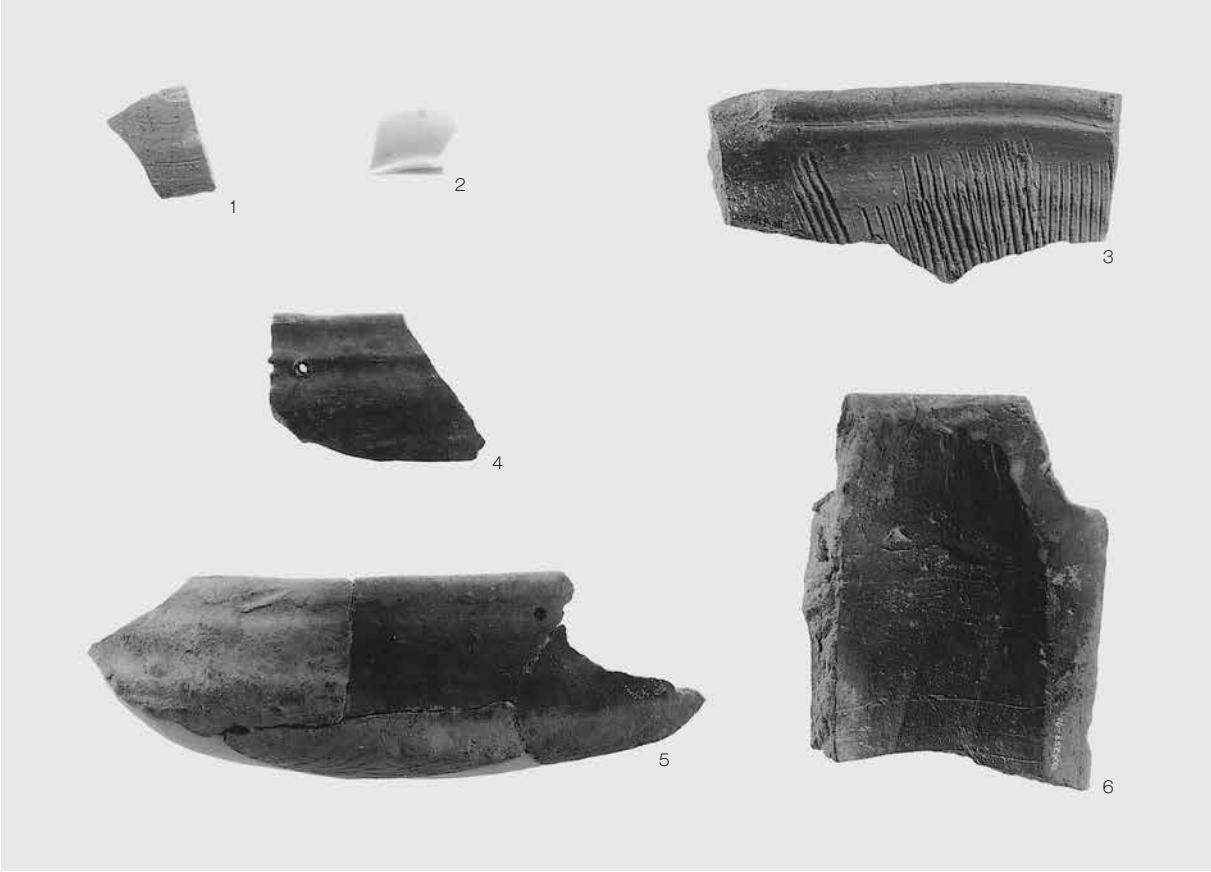
東部 SK37
（南から）

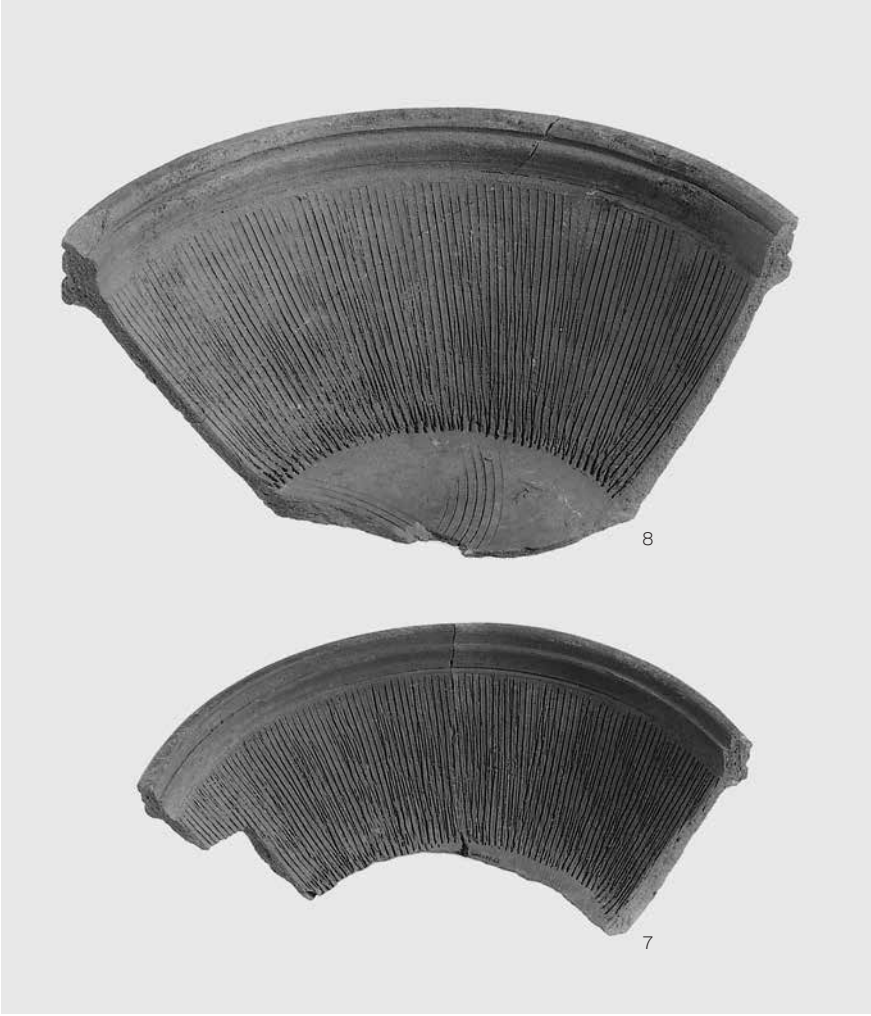
東部 SK33
（南から）

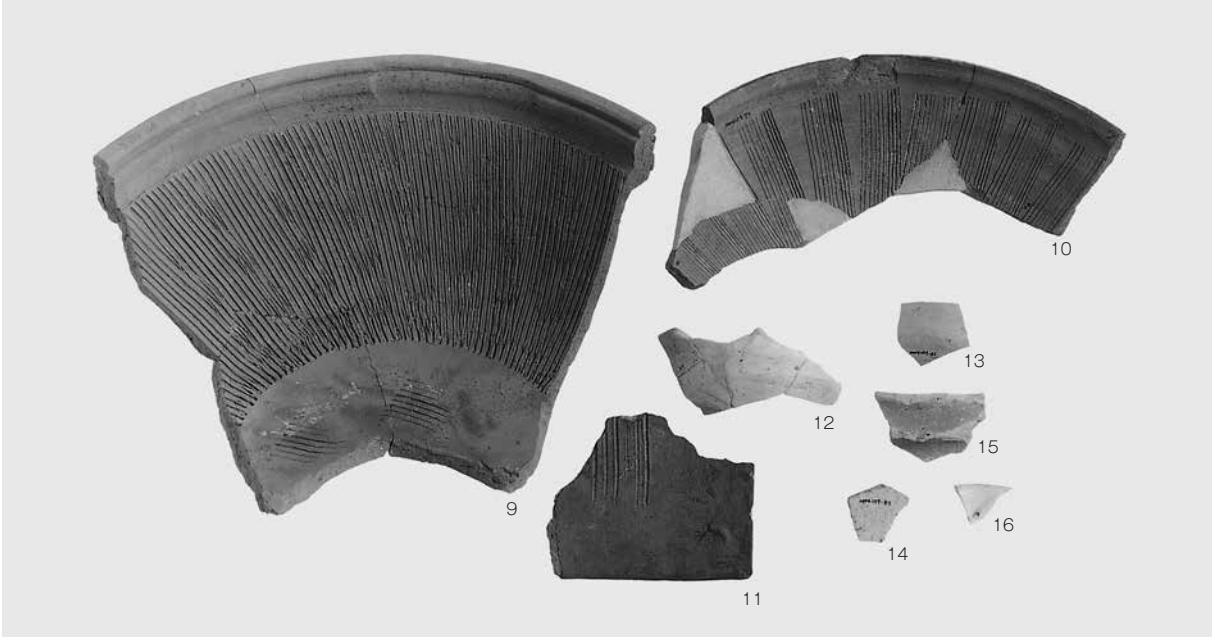
東部 SK34
（北東から）

東部 SK34 遺物
（北から）

写真図版８
土器・陶磁器（１）






9
10
11
12
13
14
15
16

17

18

19

23

20

21

写真図版 10
土器・陶磁器（3）

22

24

26

27

28

25

30

31

29

32

36

38

42

43

33

34

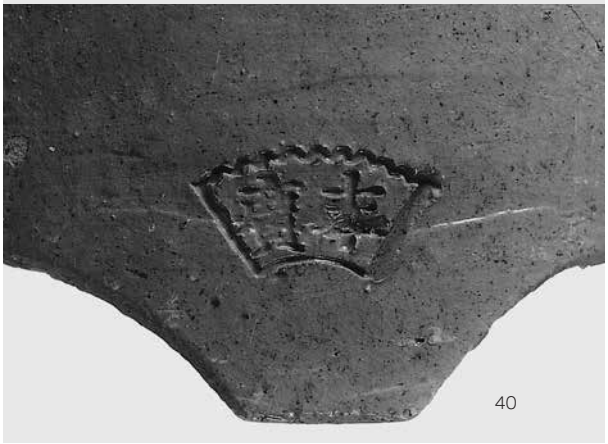
37

35

写真図版 12
土器・陶磁器（5）

39

41


40

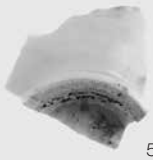
44

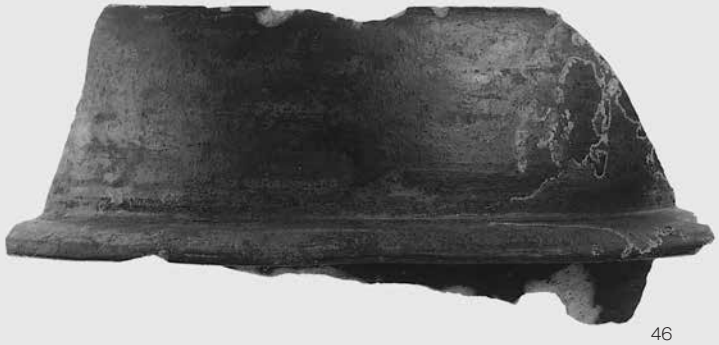
48

47

49

45


50


46

51

52

53

54

56

写真図版 14
土器・陶磁器（7）

55

57

65

62

66

58

59

61

60

63

64

67

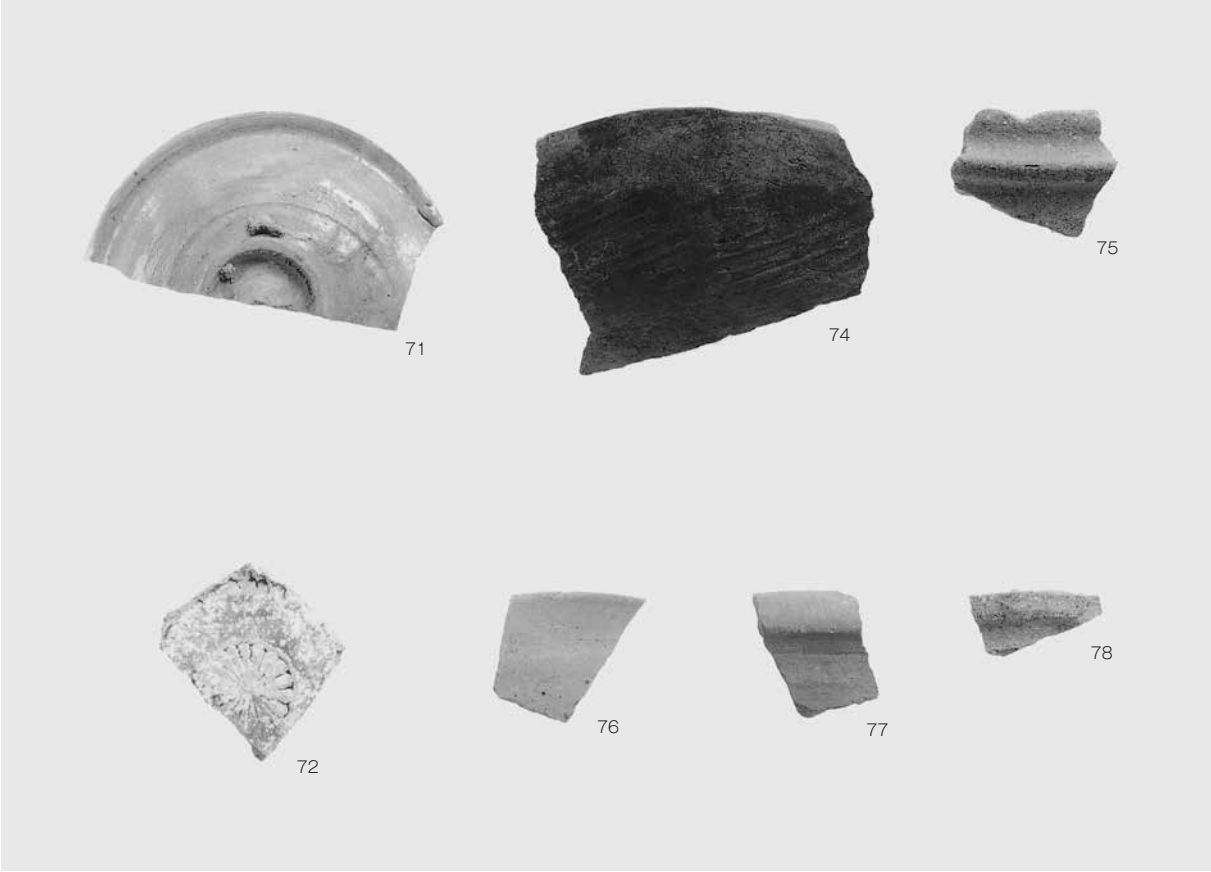
68

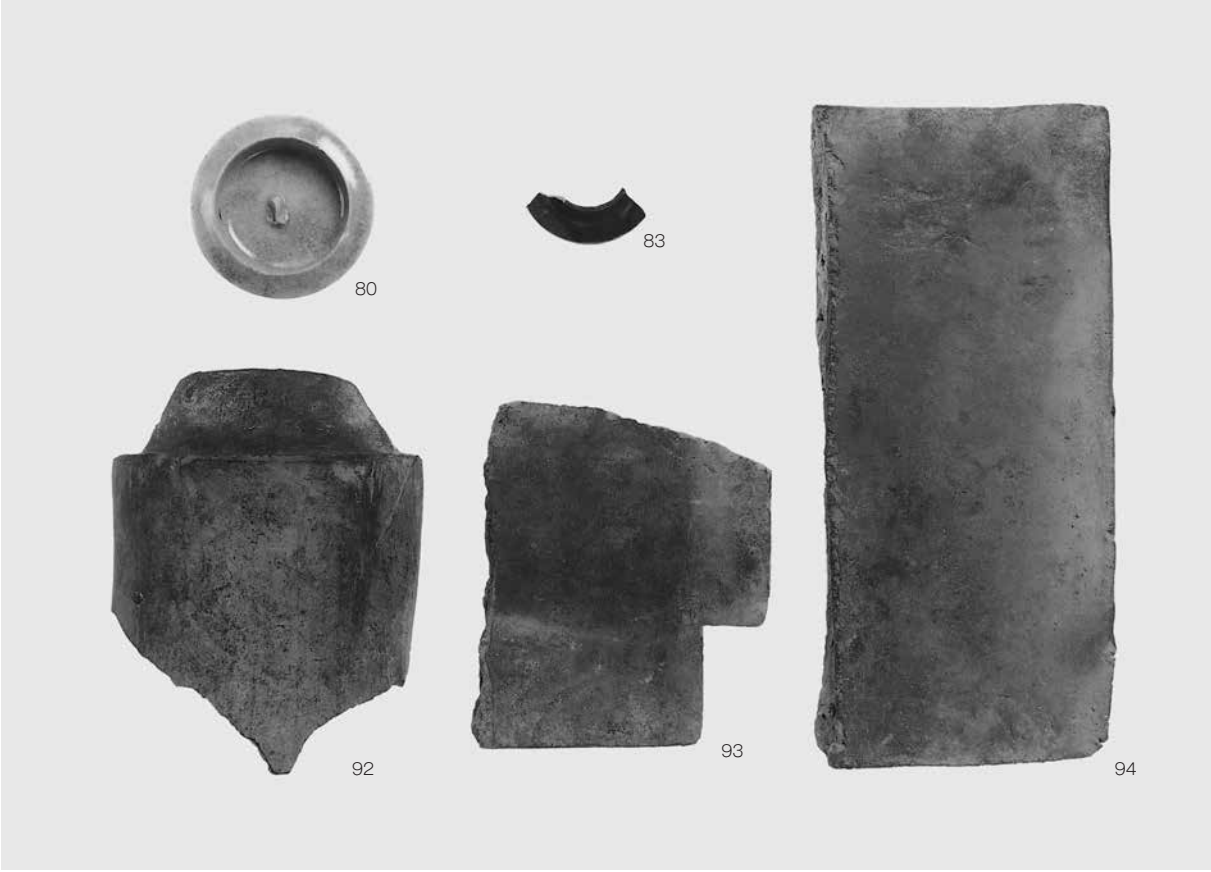
69

73

70

写真図版 16
土器・陶磁器（9）





79

81

84

82

85

86

87

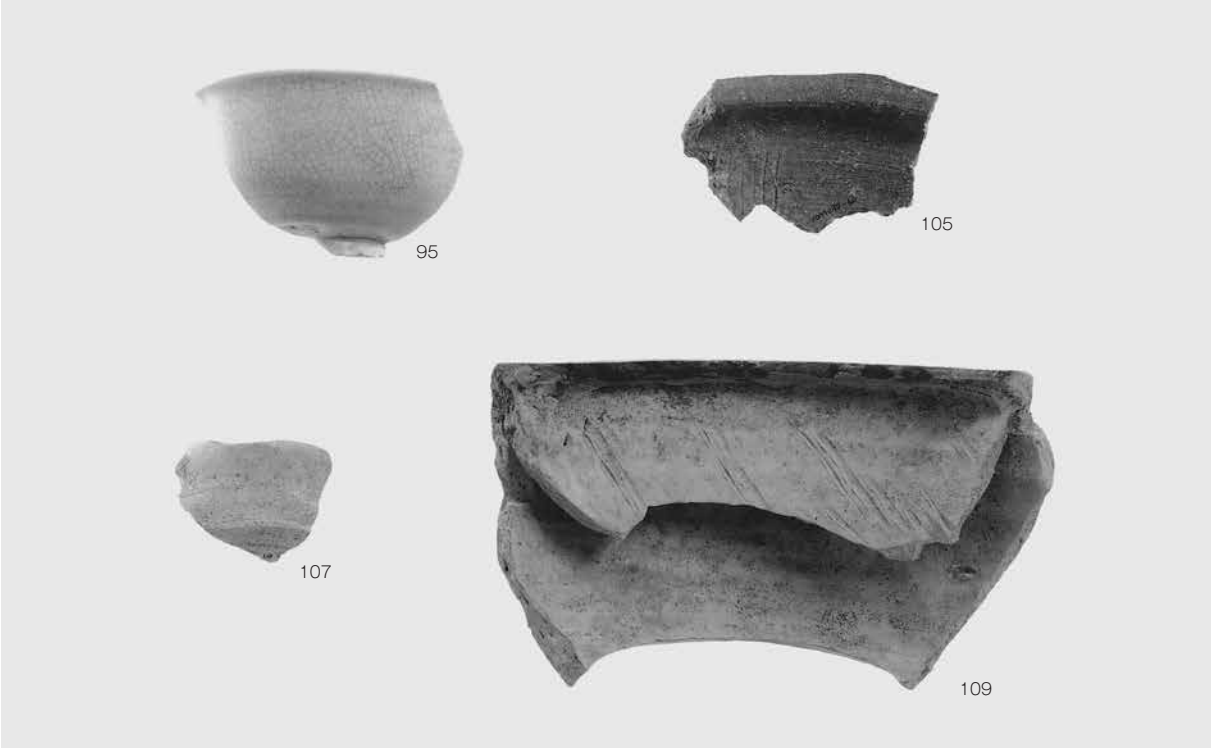
88

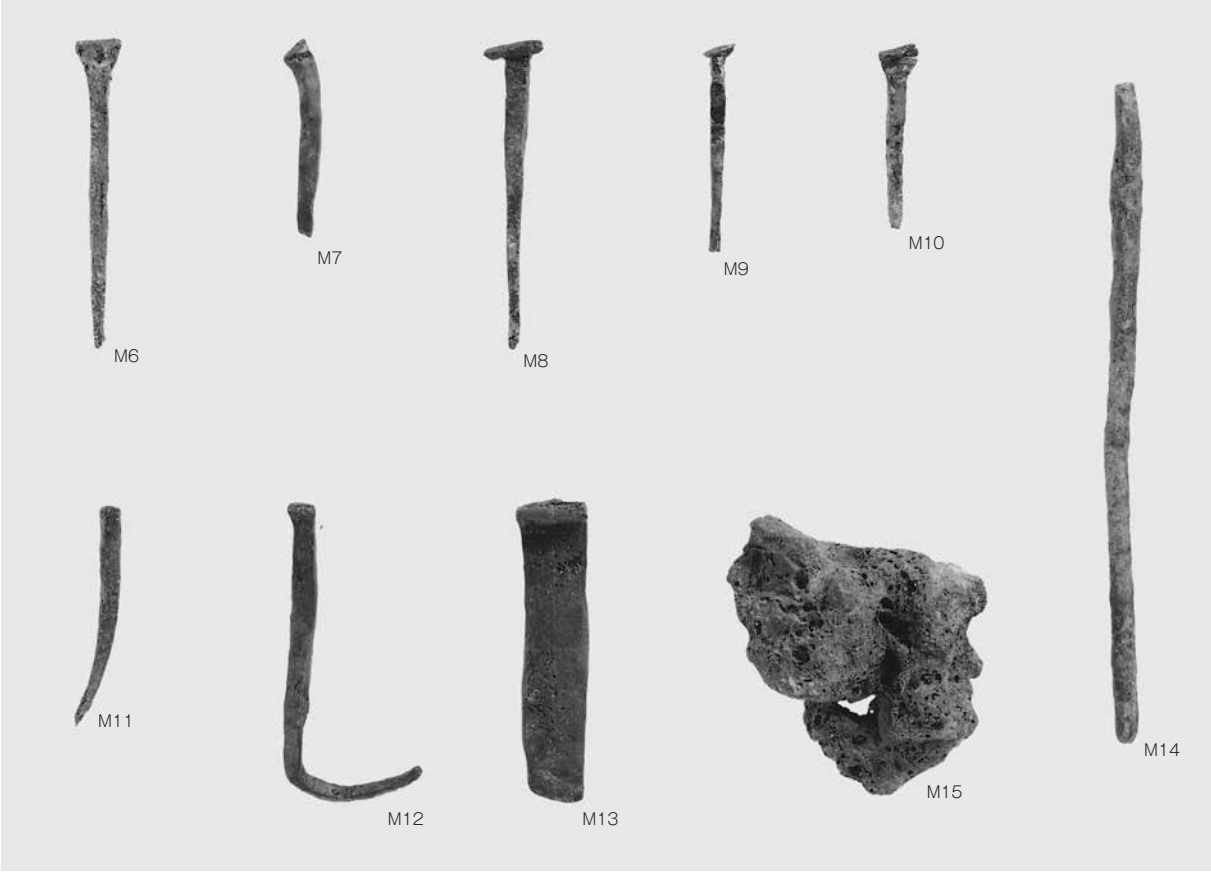
90

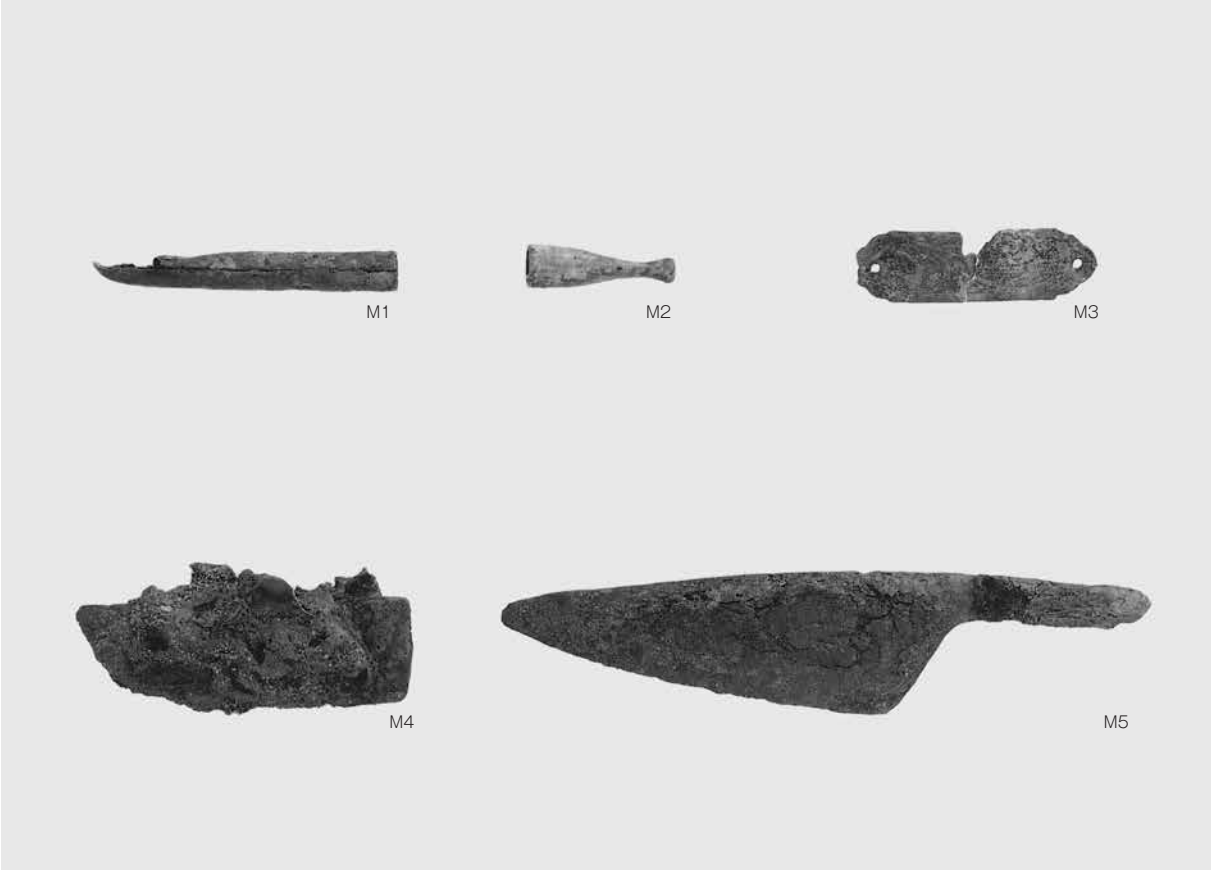
89

91

写真図版 18
土器・陶磁器（11）




M6
M7
M8
M9
M10
M11
M12
M13
M14
M15


M1
M2
M3
M4
M5

報　告　書　抄　録

ふりがな	あかしじょうぶけやしきあと
書名	明石城武家屋敷跡Ⅲ
副書名	明石公共職業安定所増築建築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第387冊
編著者名	池田征弘
編集機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号　TEL 079-437-5589
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650-8567　神戸市中央区下山手通5丁目10番1号　TEL 078-341-7711
発行年月日	2011（平成23）年3月22日

（ふりがな）所収遺跡名	（ふりがな）所在地	コード		北緯	東経	調査番号	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号						
あかしじょうぶけやしきあと明石城武家屋敷跡	ひょうごけんあかししおおあかしちょう兵庫県明石市大明石町２丁目２－９	28203	600091	34°38′57″	134°59′164″	2004237	2004年11月9日	78㎡	明石公共職業安定所増築建築工事
						2004259	2005年２月14日～３月３日	760㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
明石城武家屋敷跡	武家屋敷	江戸	礎石群、土坑	染付磁器、施釉陶器、土師器	

要約	検出された礎石群や土坑などから、武家屋敷地の区画や屋敷地内の配置を伺うことができた。

兵庫県文化財調査報告　第387冊

明 石 城 武 家 屋 敷 跡 Ⅲ

明石公共職業安定所増築建築工事に伴う発掘調査報告書

平成23（2011）年３月22日発行

編　集　兵 庫 県 立 考 古 博 物 館
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号
TEL　079-437-5589

発　行　兵 庫 県 教 育 委 員 会
〒650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印　刷　株 式 会 社 ソ ー エ イ
〒673-0898　兵庫県明石市樽屋町６－６